

異世界転生～obligations～

たいが～す

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

極道、それは敵に対しては残酷非道な一面と仲間になら己の面子を掛けて命まで掛けて助けるような温厚さを持つ、そんな極端な野郎達を指して言う。これはそんな極道の頭目が死んでそのまま異世界に転生する物語。覚悟と信念を貫き通す、そんな漢の物語。

目次

序章	新たなる世界で	1
第一章	スキルと冒険者	4
第一章	港町ラズーロと無法者達	8
第一章	殺戮と冒険者ギルド	12
第一章	自己紹介とオーク詐欺	16
第一章	異種族達と冒険者のシステム	21
第一章	戦闘狂との手合わせと武術	25
第一章	自信と成長	30
第一章	日本の食事とUnknown	33
第二章	初依頼と初心者冒険団	38
第二章	遭遇と一期一会	43
第二章	猪狩りと第二の相棒	48
第二章	良縁と食卓	53
第二章	保身と求婚	59
第二章	鍛練とお伽噺	64
第二章	排除と不穏	68
第二章	暗殺と罠	72
第二章	謀略と襲撃	76
第二章	暗愚と勝鬨	81
第二章	後始末と深慮	86
第二章	手合わせと限界	90
第三章	採取と遭難者	94
第三章	心を通わす者と再手合わせ	98
第三章	亜種族と再結成	102

第三章 湿地とスライム



107

第三章 試練と力



112

第三章 力と褒美



117

序章 新たなる世界で

「…嗚呼、しくじったか。」

竜虎組組長の竜也は凶器に貫かれた己を見てそう呟く。

くそっ、まだ俺にはすべきことが山ほどある。それにまだあの人が受け継いだ信念がまだ通せてねえ…

そう思うがもう既に出血多量で死ぬ直前。しかも毒まで塗られていたのか視界がぼやけるだけでなく体も麻痺している。不自由に動かせぬ体、後少しで絶える灯火。

「組長！しっかりしてください！生きてくださいえ！」

竜虎組の組員はそう叫び生存を願うもそれは通じることはない。

…あの人は、生きて、生きて、生き抜いて、最後に笑ってそうしてから、俺のところに来い！笑って迎えてやる！って豪気に笑いながら亡くなったよな…その約束を守らねえと…

しかし、竜也は約束を守ろうとしながら守れずに逝ってしまった…

はずだった。

………？なんだ？急に体が軽く…嗚呼そうか俺は死んだのか。

竜也はやけに眩しい日差しに照らされ地面から起き上がる。

ここは…？地獄か？それとも天国なのか？いや、それとも三途の川の手前のような冥界への道筋なのか…？

周囲のことを思案しながらぼんやりと周りを見ようとして

「だ、大丈夫ですか…？」

見知らぬ美少年からおずおずと怪訝そうな声を掛けられる。

「ん？なんだ？お前は誰だ？天使か？鬼か？なんだ？」

と、竜也は美少年が一体何者なのか問う。

「てっ、天使様なんて畏れ多いです！違います！」

僕の名前はネロ・ブレーヴァです。鬼？でもありません！」

などと慌てて美少年は竜也の間に否定で答える。続け様に竜也は

「じゃあここは一体どこなんだ？教えてくれ。」

わけもわからずに問う。ネロの方こそわけがわからなそうだ。

「ここは大国アルヴェーダです。大国アルヴェーダの領地であるエルマ地方だったと思います…なんで知らないんですか？そもそもあなたは誰ですか？」

ネロからすれば当たり前のことを知らない竜也の方こそお前は誰なんだ？という状態で矢継ぎ早に質問されたのだ。困惑するのも当然といえば当然なのだろう。

「…俺の名前は竜也という。」

…俺、生きているのか？もしかしていわゆる輪廻転生ってやつなのか？これは……

信じられない状態だった。そもそも竜也は無神論者なのだ。こういうことが有り得ないと思っていたからこそ今を精一杯生きていこうとする強固な信念を持っていたのだ。だが、死んでしまったはずの竜也は現に今生きている。頬を殴れば痛みさえある。だからこそ仏教世界でよく言われる輪廻転生に引掛かった、つまるところ俗物であつたのではないかと竜也は思案した。

…これは考えても無駄だ。新たに命を貰つたんだ。今ある命をどう生かしていくかであつて過去を振り返つてる場合なんかではないな。とりあえず、どういう状況だ？

竜也は確認の意を含めて辺を軽く見回す。そこは草原。まさしく未発達・未開発と言つても差し支えない場所だった。そこで竜也はふと、ある可能性を思い付く。

「ネロ、と言つたな。もしかして魔法やスキルというのはあるか？」

竜也は俺ながら馬鹿馬鹿しいと思いつながらネロに聞く。

「えっ？当たり前前…ですよ？なんで聞くんですか…？」

とネロは更に不信感を募らせながら竜也に言う。

マジか。まるでゲームやおとぎ話の世界じゃないか。成る程。これがボー助の言つてたイセカイテンセイ、ってやつなのか？アイツではなく俺がするとは思議なもんだ…

竜也は己のことを鑑みて有り得ないことづくめである現状に半分呆れつつ半分苦笑している。だからこそ再び生を受けた、厳密には蘇つたのだからこそ今度こそ己の信念を貫くために…そう振り返り、

信念を再び確認し、より強く確かに決意をした。

第一章 スキルと冒険者

竜也はこれから必要になっていくであろう情報について、つまり魔法やスキルについてネロに尋ねる。

「魔法やスキルってのはどんなのがあるんだ？しかもそれを確認する方法とかはあるのか？」

「えっと…スキルって色々ありますし、人それぞれで大きく違います。後、確認も何も念じたらすぐにわかるはずです。魔法も同じはずです。」

ネロはごく至極当たり前であるかの様に言う。その様を見て竜也はいよいよこの世界は元に居た世界とは全くの別世界であると確信する。確信しつつも頭の中でスキルと魔法のことを念じてみる。

すると、いきなり頭の中で声が響いてくる。無機質で、それでいてはつきりと通るその声で、

「あなたのスキルは意思貫徹です。このスキルは持ち主の意思の力によつて肉体の力が大きく変わります。そして、あなたに魔力はありません。従つてあなたに魔法は使用できません。」

そう、告げられた。魔法が使えない、その事にまた苦笑させられつつも意思貫徹という己のスキルに首をひねる。

なんだこれは？意思貫徹？決意表明みたいなもんか？だけど意思の力次第で肉体の力も大きく上がるってそれは面白いな！まさしく俺に打つてつけのスキルなんじゃないか？

なんて、竜也が思考に耽つているのを見ていたネロは興味が湧いたのかまるで弾むような口振りで竜也に話しかける。

「で、どうだったんですか？竜也さんのスキルってどんなのですか？魔法は？どんな凄いものだったんですか？教えてください！」

「ああ、俺は魔法は使えないみたいだな。後、スキルの名前は意思貫徹って言うんだ。肉体が強化されるみたいだな。そう聞くお前こそ一体どんなのが使えるんだ？」

そう竜也が答えた瞬間、ネロは愕然としたようなそれでいて嘆きを含んだ表情で残念そうに悲しげで泣きそうな声で答える。

「そう…ですか…。自分も同じスキルなんです…。自分は魔法はほんの少ししか使えませんし、そのスキルはいわゆるハズレススキルなんです…。全然強化なんてされません…。」

竜也はネロが静かにそう言う姿を見ていて嘘はついていない、と思うと共に、だが本当にスキルの恩恵は受けられないのだろうか？と、違和感を覚えつつ冷静に考える。

ふと、竜也は気配を感じ、その方向を見てみるとにやけたようなニヤニヤしたような笑みを浮かべながら革の鎧らしきものや剣を腰に身に付けた女達がこちらに近づいてくる。ネロはそれらに対し少し呆れのような困惑のような表情を向けていた。

「ん？誰なんだ？知り合いなのか？ネロ」

「はい…知り合い、ではありません。僕が弱いからとパーティーに誘ってくれるんですが…：なにか変な感じがするからお断りしてるんです…。」

と、言うネロの言葉の内容、表情、そして女達の顔から考えて竜也はある可能性に思い至る。

ああ、俗にいうシヨタコンとかいうやつか。まあ、ボー助だって異世界の醍醐味はハーレムだとかなんだとか言ってたな。まあ、俺には関係ないことだ。

そして、見事？にその考えは当たっていたらしい。ただし、1つ考えが足りていなかったことも知ることにはなったが。

「はあい、そのイケてるおにーさん。もしかしてフリー？フリーなら私達のチームバタフライに入らなあい？いいことイッパイあるわ・よ？そのネロ君も一緒にどーお？」

と腹に一物を抱えているようなそれでいて蟲惑的な、つまるところ下心満載な声と表情と姿勢でバタフライというチームの女達は勧誘する。竜也は思わず苦笑いする。そして、全く迷わずに言つてのけた。

「悪いな。既に結婚して妻子がいるんでな。お前達の誘いには乗れないな。」

あまりにもばつさりと云つてのける竜也の姿にバタフライの女達

は唾然としつつもすぐに立て直して

「妻子がいたっていいじゃない。ほら、ネロ君も。私達は強いわよ？ほら、こんな風にね。」

と、ロングソードでの剣閃や魔法を竜也とネロに見せつけるように披露する。確かに振り慣れた剣閃だ。剣が走り、煌めき、流れ、通っていく。魔法も火玉や氷結が起り、その様は彼女達が確かな実力者であるということ雄弁に語っていた。

彼女たちは自分達が強いということを見せつけられたと確信して実力証明を終える。

だがしかし、竜也は元々竜虎組組長であり、そして武を極めた存在でもある。彼は愛刀を元の世界で持っていたくらいには剣術を知り尽くしている。そんな竜也から見れば、魔法は知らなくても、彼女たちの剣閃は経験者の域を超えていない、つまりはまだまだ研鑽する余地がある、ということを見抜いたのである。

「まだまだだな。見せてやるから借してみる。剣つてのは腕のみで振るものじゃない。」

そう言つて竜也は竜也の言葉に半分苛立ち、半分猜疑心を持ったバタフライの一人からロングソードを借りて振るつて見せる。腕のみではなく、肩、背筋、腰、そしてしっかりと踏みしめた脚を基盤として横薙ぎに放たれるその一閃にも近い電光石火の斬撃は、竜也の想像した通りに…

放たれなかった。いや、違う。想像したその一撃を遥かに、圧倒的に、桁違いに凌駕し、不可視へと変貌した一閃が放たれたのだ。その一撃は少し先に生えていた雑草すらも刈り取る程の射程距離を持つたとしてもないかまいたちを作り出す程のものであった。バタフライやネロのみでなく竜也も呆気に取られる。

マジか…確かに力が漲る感覚はあることにはあつたが…これが意思貫徹のスキルの力か。まだまだ高みに昇れるじゃないか！

そんな中で竜也はまさしく脳筋かつ的確な思考で考える。かまいたちが起こる剣の速度、そしてそれに耐えられる肉体、その非現実的な事実を冷静に考えて更に更に強くなれると確信してほくそ笑む。

その様は精悍な面構えと相まって武神と呼ぶに相応しい美しさと恐ろしさを持つていた。

そして、その様をネロとバタフライは見せつけられたわけなのだが――

「ちよつとーあんなの聞いてないわよ！万が一にでも対応間違えたら危ないレベルの実力者じゃない！確かにこれ以上ない程の男前だけれども面倒事も絶対山のように起こるわよーあれー」

と、バタフライはこそこそ話し合っている。それも当然といえば当然。確かに彼女達は実力者ではあるが、まだまだ上がいる。弱いならまだこちらのパーティーに引きずりこんだままでいられるが、強い場合はその限りではない。だからこそこの男からは手を引くべきだと思いが一致する。そしてネロは

「凄いーこんなに…竜也さんは強いんだ！僕と同じスキルなのに…そうか…僕だって強くなれるんだ！」

興奮して、叫ぶような大声で言っている。彼はこの世界で自分のスキルは役立たずなのだ、とずっと思っていた。思わされていた。だからこそ、強くなれると知って感情が昂っているのだろう。今までわからなかった道が今、はつきりと示されたのだから。

「ごっ、ごめんなさいね。こんなに強いとは知らなかったな。まっ、また会ったらその時はよろしくね。」

と、バタフライの女達は竜也からロングソードを返してもらい、すぐにその場から走るように立ち去って行く。そして女達が立ち去った後でネロは興奮し続けた様子で竜也に頼み込む。

「竜也さん…どうか、僕をあなたの弟子にしてください！強くなりたいんです！お願いします！」

そう、強く頼み込まれた竜也は少し思案して、そして、はつきりとネロに向かって告げた。

「断らせてもらう。お前を弟子にする気は無い。」

第一章 港町ラズー口と無法者達

「…自分じゃ駄目ですか、そうですね…こんなひ弱な孤児を弟子にとる馬鹿はどこにもいませんよね…」

と悲観してネロはいう。その声は悲しみ、嘆き、辛さ、絶望を含み静かで暗い。そして、元々冒険者という危険な職業に誘われる子どもが往々にしてろくな生い立ちな筈もないだろうという竜也の予想は当たることになる。そして、ネロは自分の言葉を勘違いをしているなとも気づく。

「ああ、違う違う。弟子にとる気が無いのは仲間として一緒に強くなるうってことだ。孤児だなんてのは関係ない。第一俺と同じスキルだつて言うのなら意思の強さを鍛えないと駄目だ。後、俺も元々孤児だったんだ。一緒じゃねえか。なら、弟子じゃなくて俺の隣に並んでみせろ。そっちの方が強くなれるだろ。」

と、さも当たり前のように言う。その思い切りの良さと、その豪快さにネロは驚きながらも、

「本当に、本当にいいんですか…！隣にいて…！僕は弱いし、足を絶対引っ張ると思います…それでも本当に…」

「当たり前だ。いざ危なくなったら助けてやるさ。第一意思の強さが直接強さにつながるんだ。そんなにネガティブでどうする。男なら胸を張れ。足を引っ張ったっていいさ。お前も絶対強くなれる。だからもつと自信を持て。」

自信満々に、それでいてその自信に見合うようなまでの大きな態度は不思議と安心させる力があつた。ネロは恐る恐る

「…何故そんなにしようとしてくれるんですか？」

と、問う。ネロは今まで頼るものもなく、かなり過酷な生活をしてきた、しかも自信を打ちのめされていたからこそ、そんな風な言葉が出たのだろう。それに対し、竜也は真剣に

「お前は俺に色々なことを教えてくれたんだ。だからこそその礼をしなきゃならない。これはその礼替わりにすることだ。これは俺の信念なんだ。」

と、一言一言に思いを込めて言う。騙すことなど微塵も考えずに、丁寧な紡がれていくその言葉はネロを納得させるには充分だった。「ありがとうございます！よろしくお願いします！竜也さん！」

「おう、よろしくな。これから一緒に強くなっていこうな。俺とお前は同じ仲間だ。」

竜也とネロ・ブレーヴァはこの世界でお互いに信頼しあい、そして名前を馳せていく存在となる。その、物語が今始まったのだ。義理人情に厚い男と男に惹かれた少年が紡ぐ、大きな大きな物語である。

――

竜也がネロと共に草原を歩いていると少し遠くになにかが太陽光を反射して煌めいているものが地面に刺さっているようだ。その姿に、竜也は思わず走り出した。驚くネロを置き去りにして。何故ならその刺さっているものに親近感と、そして確信を抱いたからだ。その刺さっているものの正体、それは――

虎桜!? 確かに死んだ時に握っていたが、それがこちらの世界まで飛んできたのか!?

それはまさしく日本刀。しかも、只の日本刀ではない。それは、竜也が持っていた、業物であり、相棒であった愛刀である虎桜である。鞘までもが地に刺さっていた。

「竜也さん、それはなんですか? 剣…:のようにも見えますけども…:」

ネロが走って追い付き、息を少し切らしつつ問う。

「日本刀って言うんだ。で、これは俺の愛刀である虎桜って言うんだ。まさしく俺の剣術の相棒、いや、そのものだ。」

と興奮しつつ竜也は答える。その刀は一点の曇りもなく、そして刃こぼれも起こしていない。そしてその刀の姿は剣の道を知らないネロでさえも凄いものだど理解する程の業物であった。もちろん、刀は磨きあげられてこそのものであり、竜也の手入れも完璧に近い状態でされていたことも伺える、そんな至極の一品でもある。

かくして、竜也は刀を手に入れて、ネロと共に草原を歩き、近くの町に向かっていく。昼下がりの出来事であった。

竜也とネロは2時間程歩いてやっと町に着いた。そこは人の往来が頻繁に行われ、海にも面しており、商業都市というに相応しい様相を呈していた。

「この町はラズーロと言うんです。人がいっぱいいるし、結構色々売ってるんですよ！」

と、ネロは少し得意気に言う。恐らくここで暮らしていたのだろう。そのネロの姿に竜也は微笑まじさを感じつつもラズーロの町並みを見てみる。

「へい、らっしやい！この魚は旨いよ！安いよ！」

「お客さん！いい品物が沢山あるぜ！胡椒にシナモンに山椒に！安いよ！安いよ！」

「ほらほら！色々な交易品がよりどりみどりだよ！買った買った！」

などという商魂逞しい声が店先から聞こえてくる。やはり、活気があるというのは良いものだ。竜也は一人納得しながらもふと気付く。そういえば身を立てるための手段が無い、ということに。つまるところ、この世界で使える金が一銭も無いのである。元手どころか何かを買うことすらできない。

これは不味いな。とにもかくにも金が無い。このままでは何も食えずに死んでしまう…：どうにか金を稼がないと…

そう、危機感を募らせる竜也の元に、突如それは起こった。

「ヤバい、山賊だああああ！皆逃げろおおお！」

つまるところ、不屈き者の乱入である。そしてそれは、打ちのめして日銭を稼げる可能性の高い出来事である。なぜなら、元の世界でも抗争を何回も経験しているのだから、乱戦とは十八番とも言えるような戦いであるからだ。しかも、相手はこちらを殺す気でくるだろう。男は殺し、女は連れ去る。そんな外道なら殺りやすい。後腐れも無いだろう。

タイミングが悪かったな。お前らは俺が生きるために糧になつてもらう。お前らが今までに他人にしてきたようにな…

竜也は虎桜に手を掛けつつ山賊の方を見る。そして、

「山賊!?危ないです!逃げましょう!竜也さん!」

と言うネロを差し置いて、竜也は山賊のいる方面に向かっていく。遠くで大きな声で互いに意思確認をしているのか

「男は殺せ!女は連れ去れ!金品は全て奪え!」

などと喚いている山賊に対して、竜也は徐々に殺意のタガを外していく。その、人を殺した数が違う男の放つまごうことなき明確で研ぎ澄まされた殺意は山賊の乗る馬たちを怯えさせ、震えあがらせていく。ネロもそれに気付いて少し怯える。

だが、第六感が鈍ってしまっている人間である山賊達はその途轍もない殺意に気付くことができずに竜也の元に下卑た汚ならしい笑みを浮かべて突撃していく。その先が、その未来が自分達が殺戮されるものだということにも気付くことができずに、全く勘付きも怖気付きもせずに只殺されに向かって逝くのだった。

第一章 殺戮と冒険者ギルド

山賊達は己の未来を予測もできずに、刀と殺気を放った竜也に突撃していく。刀を構える竜也の様はまるで悪魔か死神のそれである。その殺気はあまりに濃厚で、はつきりと放出されているために、後方に控える馬は震え、嘶いている。だというのに、山賊達は単騎で突っ込んでくる竜也を見て

「死にに來た馬鹿がいるみてえだなあああ！」

「殺してやれえええ！はっはあああ！」

「げひゃひゃひゃひゃああ！」

などと品性の欠片も感じ取れない叫び声をあげている。前衛の山賊達は竜也との圧倒的な力量差を感じ取れずに無用心に軽率に近づいて、粗末に刀や槍を振るう。

「死ね死ね死ねえええ！」

などと叫び、己達の勝利を確信した態度で攻撃する。しかし、あまりにも粗末。腕を挙げたり引いた状態で走り込みながら袈裟斬りや突きを放つのだ。距離の計り方も詰め方もなっていないし、予備動作があからさまにも程がある。竜也はそれを避けるのは当たり前前だという表情で自然に身を躲す。柳や、流水の如く当たらない位置に身を滑らせていく。そして、

「邪魔だ。消え失せろ。」

その一言と共に、一気呵成に距離を詰め、そこから流れるように体の軸を回し、重心を後方から前方へ移動させ、大地を踏みしめるように踏み込む。そして体を完全に収縮させた状態から一気に膨張、解放させる。その様は爆発を思い起こさせる程の、その力と技で。

そして、その左斜め下から放たれる回転切りは、山賊が着込んでいた鎖帷子や、持っていた剣や槍などを紙を裂くように、そして、山賊の体も切られたその部分是最初から繋がってなどいかなかったという錯覚を覚えさせる程に自然に、豪快に、そして残酷無比に――

山賊を左斜めに一刀両断した。

山賊達の反応どころか、血飛沫すらもその一閃からすれば、止まっている速度だ。それ程に、速く速く、只速く放たれた。目にも止まらない。それどころか一切合切理解が及ばない。続け様に油断も無駄もなく放たれる二の太刀、三の太刀は、山賊達の体を容易く両断していく。あまりにも簡単に、そして機械的に、山賊の前衛は全滅した。山賊達の後衛は前衛の壊滅を、瞬間的に命が刈り取られたことに、まだ理解が及んですらいらない。それを、その一瞬間の呆けを竜也は見逃さない。地を蹴り、体を屈め、弾丸のように途轍もない速さで接近していく。

これは竜也が抗争で学んだことだ。体を屈め、弾丸が当たる面積を減らすのだ。しかも、重心は前に動く。それから起こる加速は、竜也の現在の膂力と相まって音速にすら差し掛かる速度を生み出す。そして、たった1秒にすら満たない時間で後方に居る山賊達へと接近し終え、そして、横薙ぎに騎乗している山賊達を薙ぎ払う。その推進力すら相まった、その斬撃は、またもや殺戮劇をその場に作り出した。数秒に満たない攻勢、いや、蹂躪は、山賊達の全滅で幕を引いた。おっと、馬は確保しておかないとな。売れるだろうし、元手になるだろう。ツイてたな。

戦闘が終わってすぐに竜也は、二頭いた馬を確保し、そしてその場を見回してみる。

：人体をこうも簡単に一刀両断できるとはな。このスキルは俺と相性がいいようだ。あり得ない程の身体能力を得られるとは思わなかったが。

と、十数名の山賊達が綺麗に切断された現場を見て、竜也はほんの少し武者震いをする。そこに、一部始終を見ていたネロが走ってくる。

「本当に竜也さんは凄いですね。こんなに強いなんて。僕もこんなれるのかなあ。」

と、殺戮の残酷さよりも、竜也の強さの方に興味を向けている。竜也はほんの少し苦笑いをしつつ

「お前はこれを見てどうも思わないのか？こんなに人が死んでいるん

だぞ?」

と、問いかける。その疑問にネロは

「人が死ぬのは当たり前です。人が死ぬところなんてもう慣れてます。冒険者の人だって、怪我したり、死んじやったりしているのを見えています。」

と、ドライで、そして子どもとは思えないような残酷な返答を返す。どうやらこの世界は残酷なようだ。もし、竜也が、只の人間だったら――

つまり人を殺したことの無かった人間だったら、今頃禁忌の感覚に苛まれていたことだろう。いや、それ以前に山賊を、人を殺せるどころか傷つけることができたかどうかすら怪しい。

ただし、竜也は既に殺したことがあった。しかも何度も。勿論楽なことではない。最初は大抵誰でも苛まれる。狂人でもなければ。しかし、それも重ねると禁忌の感覚は次第に擦りきれていく。つまりは竜也は既に擦りきれて禁忌の感覚が無かったからこそ殺戮ができた訳なのだが、この世界では、それが半分当然の節理として通っている。その節理に竜也はその精悍な顔を思わず顰める。

「そうか、ならいい。お前だって強くなれるさ。」

と、ネロに向かって言う。そこに、今度は冒険者達がやってくる。恐らく山賊達から町を守る依頼を受けた者達なのだろう。でも、自警団や衛兵では無いことに竜也は少し思案するが。

「なんだこれ!? 山賊達が全滅してるじゃないか!? もしかして二人でやったのか!?!」

「しかも綺麗に一刀両断されてるじゃないか!? 一方的にこの数をやったのかよ!?!」

「おいおい、銀級以上の冒険者なんじゃねえか!? なんでこの町にいるんだよ!? 聞いてねえぞ!?!」

「ふざけた実力者だなおい! しかもこいつらお尋ね者じゃねえか!?!」

などと騒いでいる。その中に冒険者の中で等級がある、つまりところそれらを定めている組合があるのかもしれないことを匂わせる発言を聞いたために、竜也はそれに興味を持った。

「あー、俺は竜也でこいつはネロと言う。後、聞きたいことがあるんだが、冒険者同士の組合ってあるのか？」

と、冒険者達に問う。冒険者達は、その発言を聞き、竜也が今までどこかで陰遁して、修行していた荒武者か、ないしは、どこからか流れてきた者だと推測した。そして、冒険者達は

「ああ、あるぜ！冒険者ギルドって言うんだ！本部はここじゃねえがこの町にもあるぜ！」

「身分とか出生とかは囚われねえ！実力者なら大抵入れるぜ！」

「しかも、実力次第では騎士団に就けたり、国に誘われることだってあるんだぜ！」

と、冒険者ギルドのことを説明してくれる。今のところ、竜也は先立つものが少なく、人との関係も皆無に近いし、情勢を全く知らない。渡りに舟かもしれないな、と考え、竜也はネロと共に冒険者ギルドに行ってみることにした。

第一章 自己紹介とオーク詐欺

竜也とネロは冒険者達と共にラズー口の町に戻った。避難していた商人たちも、そろそろと戻りつつあるようだ。そんな中でラズー口の町の冒険者ギルド支部の建物へと辿り着いた。その建物は、流石に絢爛豪華とはいかないまでも、その敷地は相当大きく、壁や屋根などもしつかりとした煉瓦作りであり、立派なものだった。

「ここが冒険者ギルドの建物なのか：成る程、立派なものだな。」

竜也はそう思う。ネロも同じ事を考えていたようだ

「ここが冒険者ギルド：：！凄いい建物なんですな：：！」

と呟いている。見たことのない規模の建物だったのだろう。その眩きを聞いた冒険者達は

「だろう！すげえよな！やっぱ！」

「こんな大きな建物に住めたら良いよな！」

「実力者なら充分この大きさの建物に住めるなんて話を聞いたことがあるぜ！」

などと口々に話かけてくる。とはいえ、いつまでも外でたむろしている場合でもないだろう。竜也は入口の扉を開けて入っていく。それにネロも続く。

どうやら、山賊達が攻めてくるのに対して迎撃の準備を済ませて今から立ち向かおうとしていたのだろう、別の冒険者達と運が良いのか悪いのか思いつきり鉢合わせした。

「手前は誰だ！山賊の一味か！」

「くそ！先行してくれたスワロウズのメンバー達は全滅しちゃったのか!？」

「でも、ここから先になんて行かせるつもりはないわ！ここで倒す！」「くそが！なめんじゃねええ！」

と、笑えない勘違いをされている。とはいえ、当然だ。ついさつきまで山賊達がいたのだ。しかも、この町に実力者は居ないと想定されていたからこそ、こんな短時間で片付いた、なんて普通は考ええない。スワロウズ達は山賊達の惨殺体を見ていたからこそ把握できた訳だ

が、もしそこで遭遇していなかったら、町中の人々に山賊と勘違いされていても、全く可笑しくはなかっただろう。

「しかも、子どもまで連れてっ……………」

「ふぎけるなっ……………」

「成敗してくれっ……………」

「はい、皆ちよつと待て待て待てええええ！」

スワロウズ達がすぐに割って入る。

「この人らは山賊達を全滅させたから違うぜ！」

「滅茶滅茶強いと思うぜ！なんせ俺らが着いたときにはもう山賊達は全滅してたんだからな！」

「だからこの人は山賊なんかじゃあないぜ！山賊のことも含めて一緒にきてもらったんだぜ！」

と、フォローしてくれた。

成る程、後始末とかもあるから俺達見知らぬ者でも冒険者ギルドに連れてきたのか。

と竜也は得心する。そして、同時に存在を知ってもらうチャンスなのではないかと理解する。この世界でも恐らく知名度は必須だろうと思つた竜也は自己紹介を始めた。

「俺の名前は竜也と言う。異国の土地からやってきた、と理解しておいてくれ。それとこいつはネロ・ブレーヴァだ。相棒として一緒にいる。」

「ネロ・ブレーヴァです。まだまだ弱くて竜也さんには全然及びません。ですが、頑張ります！よろしくお願いします。」

と、ネロもともに挨拶した。冒険者達は興味津々な様子で話しかけてくる。

「へえ、竜也とネロっていうのか！山賊達を全滅させるなんてやるじゃねえか！強いんだな！」

「おつ、それは和の国のカタナ、とか言うやつだな！成る程、そこら辺から来たんだな！よろしく！」

「それにしてもとんでもない男前と美少年よね。本当に冒険者なの？充分その容姿だけで食べていけると思うのだけれどもねえ…」

と、それぞれに興味を持つ点は違っているようだ。それにしたつて、流石に身売りなんてしないが…と女冒険者の言葉に竜也は思わず苦笑いをする。ネロも同感のようだ。と、そこへ受付嬢と思われる女性が駆けつけてくる。

「はあく男前なんだなあ…その君も美少年だ。この二人が山賊達をこの僅かな時間で殲滅させるなんてなあ。にわかには信じられん話でもあるが、スワロウズ達は正直だ。本当のことなのだろうな。竜也とネロと言ったな。私はオーク族のアイシャ・ノエルリンデというものだ。よろしくな。」

と、自らをオークと紹介した受付嬢は言った。

…なに？オーク？よく色々なもので見掛けるあのオークなのか？むう、創作と実物つてのは大きく違うものなんだな…

そう、竜也は内心でカルチャーショックを受ける。それもそのはずである。なにせ、目の前にいる自らをオークと語る女性は色々なところで描かれる、醜悪で、巨体で、臭く、下品で、そして雄ばかりである、というイメージとはかけ離れている、なんてものではなく最早正反対と言っても差し支えない、まるでエルフのような姿であったからだ。

確かに豚の体脂肪率つてのは15〜20%が標準で、それを人間に換算すると、女性はグラビアアイドルにも匹敵する、とか言ってたな…その上、確かオークつてのは豊穣の妖精で、エルフのような妖精よりも益のある存在ではなかったか？そうだと考えれば、これにも納得はいくが…

竜也は思考を張り巡らせつつ、もう一度アイシャをみる。

陶磁器のような白い肌、それを引き立たせるように差す朱色の唇とほんの少し桃色の頬。零れるようにサラサラで透き通る絹のような金色の髪。野性的であり、それでいて滑らかで力を湛える鋭さを持ち合わせた美しい碧色の眼。健康的で、それでいて黄金比を実現している芸術的な大きさと形を持つ美しい四肢と顔貌。母性を、無条件の偉大なる愛とも言えるそれを湛える豊満で美しい形を保つ胸。そして、気品溢れるその佇まい。

オーク詐欺

竜也の脳内にそんな言葉が浮かび拳がつてしまう程には健康的でどの世界でも男性を振り返らせるような、下手をすればエルフよりも美しい、絶世の美女が目の前に居た。

事実、男の冒険者達はアイシャに釘付けになっていたり、女の冒険者達はアイシャのその美しさに嫉妬したり、胸に手を当てて絶望した顔を晒していたりしている。

「ふむ、で、君たちの実力はまあ、相当なものなのだろう。だが、まだまだ実績がないな。冒険者になるとしてもまだ知識もないだろう。ちなみに、私が冒険者ギルドについて説明した方が良いかな？」

と、アイシャが問うてくる。願ったり叶ったりだろう、竜也はぐさま領いて承諾した。

「うむ、承知した。まずは、冒険者ギルドというのは互助会のようなものだ。どうしても一人で出来ることは少ないからこそお互いに助け合うために設立されたものだ。そして、ここは実力者が第一、ではない。やはり、実力者であろうとも信頼がなければ話にならないからな。つまるところ、評価によつて立場が良くなっていく。後、その立場を示すものが等級であるのだが…この等級の向上は信頼と実力両方求められる。

等級の段階は銅・青銅・鉄・銀・鋼・金・ダイヤ・オリハルコンと8段階ある。

銅は初心者、青銅は一人前、鉄は一流、銀は超一流、鋼は天才、金は傑物、ダイヤは化け物、オリハルコンは英雄だと定義されている。

基本的に大抵の冒険者は鉄で終わる訳だが、恐らく君は銀以上に駆け上がれるだろう。だが…銀以上は少ないし、現状では金が最高位だ。このアルヴェーダ王国も相当大きいが如何せん等級の判断が厳しい。銀以上なら普通にどこでも優遇が受けられる程だ。ここまではいいいな？」

アイシャは言う。竜也は頷く。ネロは理解ができていない、わからない表情をしているが、続く。

「これでも銀以上は私たちには化け物と呼べる存在だ。故にそこから

上の等級は国からも引き抜きの話を持ち掛けられることもある。まぐれでは上に昇れないからこそ等級は実力証明にもなるわけだからな。勿論冒険者ギルドはそれらの戦力とも言える者達が所属しているわけだし、そんな者達が集まってくる可能性もあるわけだから強引な圧を掛けてくることは殆ど無い。とはいえ冒険者は常に危険と隣り合わせだからこそ安定を求めて国の誘いに応じる者も勿論いるがな。

つまるところ、冒険者とはかなり自由で見返りも多いがその分責任が大きい。理解したかな？」

アイシヤは説明を終える。

成る程、実力だけでは上がれないからこそ、恩恵も途轍もない訳だ。だからこそ信用も大きいのだな。

竜也はアイシヤの説明に納得する。ネロはやはり、理解できていないみたいだが。

「わかった。なら質問だ。冒険者ギルドで、指定されるようなルールはあるのか？」

竜也はアイシヤに問う。アイシヤは、

「ああ、あるさ。犯罪となるようなことは全面的に禁止されている。当然だな。もう一つは、等級は年に一度更新される。後は基本的には無い。」

と、答える。そして続け様に、

「入る気にはなってくれたかな？」

と、問いかけてくる。

「確かにノーリスクハイリターンというわけか。わかった。加入手続きをさせてくれ。」

かくして竜也とネロは冒険者となることにした。果たしてどんなことが待ち受けるのか、まだまだわからない。だが、少なくとも今より状況は良くなるだろうと思いつながら竜也は手続きを済ませていく。

第一章 異種族達と冒険者のシステム

竜也とネロはアイシヤが示す手続きの通りに従う。

「この書類が示すのは、もし怪我をして死んでしまったとしても自己責任だ、ということと、先程話したルールが書き込みである。わかるか？」

アイシヤが説明しながら、文字が書かれた書類を渡してくる。

：しかし、わからない。言語自体はある程度通じていた。だが、文字はどうやらその限りではなかったらしい。識字ができないのである。

「言うことはわかったが、文字が一切わからない。すまないな。」

「成る程。確か遠い異国の地から来たのだったか。大丈夫だ。そういうのも想定の内だ。というか、冒険者の識字率は案外高くない。内容を話していくが、殆どのかい摘んだ内容は先程話した通りだ。そのネロとやらも大丈夫だな？」

「は、はい。なんとかわかりました。大丈夫です。」

「では、これに同意するなら、このプレートを受け取ってくれ。ちなみに、これはネームタグだ。クエストを受けて、遂行するときの手渡す。身の安否と、受けているクエストを知らせるものになる。いくつか渡しておくが、必要に応じて受け取ってくれ。」

「わかった。合理的なものだな。」

「ちなみに、遠い異国の地から来たのだったか。一体どんな字が書けるのだ？」

「ああ、日本語というが平仮名や漢字が書ける。こんなものなのだが…わかるのか？」

「ん？ああ、ヒノモトゴじやあないか！成る程。どうやら教育を受けていたのだな。ネロとやらは…どうやら無理みたいだな。」

日本語が通じるのか…？不思議なものだな。だからこの言葉が通じているのかもしれないな。

そう竜也は思案する。ちなみに、ネロはオタオタしていた。アイシヤは、

「ヒノモトゴがわかるならまあ、すぐにこの国の言語にも慣れるさ。よし、これで、入会完了だ。これからよろしくな。竜也、ネロ。」と、話しつつも、業務をしつかりとこなしている。その様子も充分様になっているところを見ると、案外歴も長いのだろうか。

「ところで、俺はこの国に来て日が浅くてな。周辺事情と情勢に疎いんだ。できればそれも教えてくれないか？後、この後、何をすればいいのかもな。」

竜也はアイシャに頼む。アイシャは快く教えてくれた。

「この国はアルヴェーダという。その他に様々な国がある。大国はこの国以外にはガーランドとグレスガルがある。他に帝国があり、ハルトリーとケストの2つがある。後は連合国が3つ。トラミネルとヨフラン、エスキアだな。今は戦争は起こっていない。というより、起こしている余裕がない。魔物がどうも多くてな。衛兵や兵隊などは魔物鎮圧の為にかなりの数が出払っている。」

成る程、どうりでこの町に衛兵などがいなかったわけだな。留めておく余裕なんてなかったわけだ。

竜也は山賊襲撃の時に衛兵がいなかったことと、冒険者が国に引き抜かれる訳を同時に得心する。そのままアイシャは説明を続ける。

「後、人間以外の種族もたくさん存在している。主に魔法のエルフ、鍛冶のドワーフ、雑貨品や日用品のゴブリンやコボルト、農産のオーク、建築や力仕事のオーガなんて感じだな。勿論、結束も能力も人を上回る。下手に喧嘩を売ったりするのは得策ではないな。」

後、奴隷制度も存在する。」

「奴隷制度？前時代的なことをしてるもんだな。」

「恐らく、想像しているのは違うぞ？奴隷とはいえ、大抵は債務奴隷だし、戦争奴隷も犯罪奴隷もいることはいえるが、無意味に傷付ける、食事を与えない、なんてことは禁止されている。戦争奴隷も、子どもまでは引き継がれず、孤児として扱われたりする。奴隷に犯罪をさせる所持ち主も一緒に問われかねないし、債務奴隷は借金を返済しきると解放される。その時に持ち主が奴隷に用途以外の不適切なることをしていたと訴えられると、情報探索魔法が掛けられて、不適切だったと

されれば罰せられる。つまるところ、奴隷、とは言っても国にもよるがそこまで酷い扱いは無いさ。」

「成る程。でも、かなり甘い気もするがな。何故だ？」

「確か大分昔はかなり酷い扱いだったみたいだ。だが、それで不満が爆発してな。強国で奴隷が国の大半を占めていた国が一夜にして滅びたことがあったそうさ。それから、すぐさま奴隷の扱いが今に準じたものになったそうさ。今そんなやつを見掛けたら国の衛兵が飛んで来てしよつぴかれるがな。」

「下だと思つて舐めているからそうなるんだ。当然と言えば当然だ。」

「…んで、これからどうすればいい？」

「そうだな。まずは…まあ、連れてきた馬を買い取ろう。スワロウズが教えてくれたやつをな。その時にこの国の通貨と、その単位を教えよう。後は、冒険者ギルドのシステムを教えようか。」

「すぐさまアイシャは馬を二頭買い取つてくれた。どうやら馬はやはり物入りなようだ。その時にこの国の通貨はアルダといい、銅・銀・金・白金がある。因みに次の単位に上がるには元の単位が100居る。つまり100銅貨は1銀貨。そして滅多に見掛けぬ真貨というものもあるらしい。これは100枚の白金貨と同等らしいが…馬二頭の値は2白金貨34金貨56銀貨だった。まあまああの値段だが、市場ではもつとするとアイシャは言う。まあ、維持費とかも掛かるし、関係を作るのを考えればこれくらいは構わない。」

「まあ、相当稼いだな。そのくらいあれば、無駄に使わなければ、一年は暮らしていけるぞ。」

と、アイシャは言う。どうやらかなりの大金のようだ。丁寧に懐に仕舞いつつ、アイシャの続きを聞く。

「さて、冒険者ギルドとは互助会だ、と言つたな。とはいえシステムはかなりしつかりしている。まず、パーティなのだが、基本的に不足していれば、別の者と共に組むことを推奨する。後、クエストなのだが、難易度が低くてもある程度、高ければできるだけしつかりとブリーフィングをする。この時に難しい、もしくは専門的であれば道具を貸与、ないしは支給する。消耗品は支給だが、道具は貸与だから返却必

「須だ。覚えておいてくれ。」

「成功率を高める為には全力を尽くすということか。わかった。取り分は？」

「基本的にはイーブンだが、情報が少ない、あるいは支給品が少なければ4:6や3:7なども存在する。とはいえ、難易度が高いものはやはり稼げる。だが、受けるにはそれ相応の等級が必須だ。こんなものだな。後は、必要の無い道具ができれば此方では買い取るぞ。これらは貸し出す道具にもなる。一応覚えておいてくれ。」

これはよくできたシステムだな。成功率をできるだけ高めようとする工夫を感じる。だからこそ、依頼がしつかりと舞い込み、それを達成させるから、信用ができる。そして、冒険者の近くは安全圏だ。故に商売が繁盛する。そうなると、通商を広げるものが多くなる。そうするとまた人材が集まり、どんどん大きくなってゆくわけだ。そうして町が形成されるのか。面白いな。

「よくわかった。ありがとう、アイシヤ。じゃあ、次に俺がすべきことはなんだ？まだ時間があるんだ。教えてくれないか？」

「ふむ、どうやら竜也は聞きたがりやさんのようだな。…そうだな。よし、次は私と手合わせしよう。」

…手合わせだと？

第一章 戦闘狂との手合わせと武術

「ああ、そうだ、手合わせだ。勿論、ネロもそうなのだが…なにか不満か？」

アイシャは不思議そうに聞く。その首を傾げて問う姿はまるで絵画に描かれるワンシーンのようだが、そんなことは竜也にとってはとうでもいい。それより、先程の発言について細評を問う。

「冒険者ギルドとは信用で等級が決められるのでは無かったのか？ 関係無いはずもないだろう？」

「ああ、そのことか。確かにそうだ。でもな、信用に値する實力があるのかどうかも調べたいのだ。後な、私はこう見えて元冒険者だ。銀級のな。私は入ってくる者の實力とスキルを確かめている。それを元にクエストを勧めたりもするからな。さてと、では、やろうか！」

と、アイシャはかなり興奮した面持ちで立ち上がる。

嗚呼、バトルジャンキー戦闘狂（？）とかいうやつか…そういうやつもいたな…かなり厄介だったが…こういうやつこそアグレッシブかつ冷静沈着に攻めてくるしな…

と、竜也は思わず顔を顰める。竜也は確かに武を極めている。だからこそ、無用な闘いを基本的に避けるようになった。だが、今は必要なようだ。

「装備を来てくる。そこの庭に出て待っていてくれ！すぐに戻る。」

などといいながらアイシャは部屋の中に入っていく。そうだな、身体をほぐしておこう、と外に出て身体を動かし温めつつ伸ばして準備する。ネロもそれに習ってアップをしている。

すぐにアイシャは戻ってきた。見ると、その美しい身体は顔を除いてほぼ全て鉄製の鎧に覆われている。兜こそ無いが、まるで騎士を思い起こさせるような様だった。

唯一つ。その両手に握られた、女性が持つものとは全く思えないほどの重量を感じさせる大剣を除いて。見ればその大剣は恐らく鋼でできている上に適切な部分に補強がしつかり施され、まず間違いなく業物であると理解できる。だが、重量も桁違いであるはずのそれをま

るで棒のように振り回すその怪力。間違いなくアイシヤが実力者であることを感じさせる。が、刃の先には鞘がしっかりとあり、当てても打撲程度で済む手筈になっているのだろう。

「で、どちらからやるんだ？どちらからでもいいぞ？私は。ああ、久しぶりだな！腕も高鳴ると言うものだ！」

明らかに戦闘^{バトルジャンキー}狂のそれである。とはいえ、竜也はそれに今更怖気付くレベルはとうに越えていた。

「俺からだ。後、今回は刀は使わない。刀を使ってしまうと手加減できる自信がないし、鞘を着けたまま加減なぞ難しい。木刀でも同じだ。だから素手でやる。」

と、竜也は答える。残念さを隠そうともせず

「やりたかったんだがなあ、仕方ないか。」

とアイシヤは呟いている。そして、すぐに切り替えて、アイシヤはその大剣を竜也に向けて構え、

「さあ、始めようか！本気の姿が見れないのは残念だが、仕方あるまい！さあ、かかってこい！」

闘争心を剥き出しにし、美しい顔そのままに獣のような眼光を放ちながらもこちらを見る。

：隙が無いな。流石は元銀級冒険者。武術としても相当大成している見える。しかも、気迫は最早獣のそれだ。かなりの手練である上に恐らくだが被弾を恐れないだろうな。

竜也は拳を前に置きつつ腰を少し落としながらアイシヤを冷静沈着に分析する。アイシヤも

「竜也は隙が無いな！なかなかだ！なら、こちらからいかせてもらおう！」

などと、しつかり様子を見つつ、そして、突進してくる。しつかりと地面を脚で掴んで蹴り、推進力と換えて進むその様は大剣や鎧など着ていないかのように錯覚させる程鮮やかで軽やかで尚且つ速い。

1蹴りですぐに間合いに入り込み、アイシヤは掴んでいる大剣を右側へ横薙ぎに振り抜く。まるで手足の一部のように扱うその一撃は、手加減が感じられない速度だ。まともに受ければ只では済まされな

い一撃だとはつきりわかる。

しかし、竜也は慌てない。慌てる要素など無い。想定範囲内だ。少なくともその程度は考えていた。故に、その大剣の一撃を、右の掌を剣の腹に当たるように差し込み、そこからすぐさま体勢を屈めつつ右腕を上に向けて振り払う。流しと弾き。両立させたその動きは大剣を上を反らせ、その致命の一撃を回避することに成功する。竜也のすぐ上にはとても大きな一閃が通り過ぎる。

アイシヤは大剣を弾かれた瞬間後ろに身体を回転させながら飛び退いた。

「驚いた……大剣を素手で受け流すか！どうやら竜也は武術でも相当強いのか！面白い！」

と、興奮と闘争心を抑えきれない様子で話してくる。しかし、今の一撃は当たれば普通に不味い筈だ。なのに……

何故か当たっても大丈夫な気がするのだが……なんだ？別に手を抜いている訳でも無いし、普通に当たれば危険な筈だ。なのに、俺はこゝうも完全に落ち着いている？何故だ……？

つまるところ、負ける気がしないのである。少なくともアイシヤは強者だ。油断がならない相手の筈だ。今の一撃だって、鞘が付けられているとはいえ、明らかに恐ろしいものであつた筈だ。なのに、当たっても大丈夫だと思つてしまうのだ。とはいえ、当たるのは得策とは全く言えない。

まあいい。相手に集中しよう。大剣なんて相手取るのは初めてだからな。恐らくあれは人体と同様くらいの重さがある筈だ。だから、上手く力を反らせれば体勢を崩しやすい。……が、相当いなしに慣れている。先程の回避から見ても普通のいなしは一切効果的では無いだろうな。なら……

本人そのものを崩す。

そう決めて、竜也は前傾姿勢を取り、アイシヤがしたことと同じように大地を脚で蹴り、推進力を得て突進する。

「潜り込めば勝てる訳ではないぞ！」

アイシヤはすぐに足元を大剣で横薙ぎに暴風の如く振り払う。そ

の一撃を、大剣自身を踏み台にして、僅かにアイシャを飛び越える。アイシャはそれを捉えようと足払いの勢いそのままに回転し、大剣を竜也に向けて迫らせる。慣性の威力を持つその一撃をまたもや屈んで躲す。そして、アイシャのゼロ距離まで接近、続けざまにアイシャの美しい顎と腰を抑え、そしてそれを押し引く。

頭とは元来身体の中でも相当重い。それを動かされると、バランスは大きく崩れる。そして、腰は人体を支える屋台骨のようなものだ。下半身と上体を繋ぎ合わせているそのキーポイントを崩す。

「なっ……！」

アイシャはバランスを崩し、倒れ込む。その際大剣を地面に刺して軸としてバランスを取ろうとしたところから鑑みてもやはりアイシャは強者だ。だが：

竜也はアイシャがバランスを崩したタイミングを見逃さずに顔面寸前に掌底を突き付ける。1分に満たぬ、僅かながらも濃密な戦闘は終了した。

「は、はははは。参った。私の負けだよ。凄いな君は。負けたのは久方ぶりだ。ただの力押しではなく、明確な技術と胆力、経験を持ち合わせたその判断と行動。文句無しだ。君は間違いなく私より強いな。」

アイシャは笑いながらそう話しつつ、体勢を立て直す。その笑顔は向日葵のように明るく、芸術的な程に美しかった。ただし、彼女が笑っている内容は淑女とはかけ離れすぎたものだったが。

「そういうアイシャこそ、途轍もない研鑽の上に今があるように思う。強いな。流石は元銀級冒険者だな。」

竜也は正直な感想を伝える。そして、アイシャが「そういえば、スキルは肉体強化の類いか？それなら私と同じだな。私のスキルは肉体強化だ。」

と、戦闘で興奮していたにも関わらず仕事もこなしていたようで、竜也に問いかける。

「ああ、意思貫徹などと言う。これは意思の力によって肉体強化がされる。因みにネロも同じだが：まだ使いこなせてはいないようだ。」

と、答える。アイシャは

「意思貫徹……？やけに面白いスキルだが……それはかなり脆いな。確かに強いが心というのは簡単に移ろいゆく。それを使いこなすのはさぞ難しいことだろうよ。」

と、冷静に分析している。確かにそうだ、と思いながらも次に闘うネロを見やる。そのネロは緊張しつつ、此方側を向いていた。

第一章 自信と成長

ネロとアイシャの手合わせだ。ただし、今度は竜也がしたように大剣を持っていない。それに加え、手甲ガントレットを外して構える。流石に実力差がある、ということアイシャは見抜いているようだ。「次はネロか。…ああ、安心したまえ。普通の実力査定はこれでやっている。悔っている、という訳ではないぞ。」

：じゃあ俺の時は楽しむ為にあんな大剣と本気の闘気を向けてきたのか。それでいいのか？公正さはどこにいった…？

竜也は目の前にいる戦闘バトルジャンキー狂に少し呆れつつも構えを見る。

剣士なのには違いないが、それを支える根幹となる武術と身体能力。それを用いた近接格闘術は間違いなく一級品のそれだろうな。ネロの初戦としては明らかに強すぎる。実戦でないのが幸いな…。

アイシャの構えは堂々としており、それでいて隙が無い。勿論多少の歪さこそはあるが、経験とそこからくる勘に加え、大剣を棒のように振り回し、持ったままでの跳躍すら可能とする身体能力。そこらにいる武術家程度では敵わないだろう。

それに比べネロは貧弱だ。美少年であることに、儂げさを加え、完璧なまでの美しさを持つているその細い四肢は、戦闘には全く役に立たない。むしろ、足を引つ張りかねない程度だ。武術の心構えなど知らない隙だらけの構え。それは最早構えですらない体勢。

アイシャは美しい怪物モンスター。滾る力を感じさせる。それに比べネロは吹けば飛びそうな枝のような身体。

勝ち目など無いがやるしかないだろう。死ぬ訳でも無いのだし、なにより実力査定なのだから。

そして、心の準備ができたのか、ネロが勢いよく

「よろしくお願ひしますー」

と言う。と同時に試合は始まる。

「行きます、やあっー！」

ネロはすぐに、掛け声とともになっていない体勢で飛び込んでいく。遅い。無駄が多い。走っているから間合いも図れていない。そ

れでアイシヤが動じる訳でも無い。避けも止めもせずに受ける。完全に受け止める。

「どうした！ネロ！その程度か！それでは私を動かさんですけど！」

アイシヤは微動だにすらしらない。

「うっ、うううううう」

ネロは必死に動かそうとするが、全く動かない。いや、動かせない。「むう。これでは冒険者になっても、しばらくは下積みをせねばならんな。力も技術も覚悟もまだまだ足らなさすぎる。」

冷酷にアイシヤは真実を告げる。絶望的な実力差。そんな中、竜也はあることに思い至る。

心は簡単に移ろいゆく。それを使いこなすのは難しいことだろうよ。

アイシヤの言葉、そしてネロは自分と同じスキル。そこから導き出されるある一つの逆転の目。

「ネロ！もっと自分の力を、強くなりたいという覚悟を信じろ！俺が相棒にしたんだ！お前ならやってやれないことはない！」

そう、大声でアドバイスする。ネロのスキルも意思貫徹。身体能力を強化する。なら、自分の覚悟を信念を再確認させれば……

「ぬうっ！」

すぐさま効果は出た。微動だにしなかった、アイシヤの身体を貧弱で細い芸術品のようなその腕で脚で身体で押し出し始めたのだ。

「成る程……これが意思貫徹か！面白い！なら、私も力を出そう！」

アイシヤは興奮し始めながらネロの身体に美しい手を回し、そして力をこめて押し始める。すぐに、ネロが押し返され始めた。

「強くなりたいのだろう！ネロ！更に信念を強く抱いて私を押ししてみろ！強くなりたければこれ以上に今以上に覚悟しろ！してみせろ！」

アイシヤは戦^{バトル}闘^{ジャンキー}狂の姿を垣間見せながら、噛みながらそう言う。

「まだまだ！まだまだまだああああ！」

ネロは湧いてくる力によって自信が少しいたのか声にも身体にも覇気が出始める。

美女と美少年の押し相撲。

そう言えば穏やかな雰囲気だが、徐々にそんな生ぬるい雰囲気では無くなっていく。というより、地面の抉れ方から相当な力同士で押し合っていることが見てとれる。

「ふふふ！面白い！面白いな！ネロ！」

「僕はっ！強くなるんだあ！」

そして、遂にネロはアイシャを押し返し始めた。力でアイシャを上回り始めたのだ。だが、アイシャはネロの土俵にわざわざ乗って勝負してあげていたのに過ぎない。力で押し返され始めてすぐに、力での押し合いから切り替えて、力の流れを崩し、そして、ネロを押し倒す。ネロは悔しそうにその綺麗な顔を歪めて呟く。

「ううっ！まだ駄目なのか…」

ネロの嘆きにアイシャは真剣な言葉を紡ぐ。

「いい力と覚悟だった。だが、経験と知識と技術が足りないな。身体作りもだ。今は君の負けだ。だが、いつの日か、私を越えてみせろ。君にはそれだけの力が秘められている。そして、私よりも強い良い相棒がいる。応援する。強くなれ。」

「…はい！」

ネロは少し悔しそうながらも褒められたことにしっかりした反応を返す。試合はやはりネロの負けに終わった。しかし、ネロにとっては得るものが多い試合となった。アイシャも想像以上だったようで、満足げだ。

これは俺もうかうかなぞしてられないな…。俺は貫き通すと決めた信念がある。それを守り抜く為にはまだまだ力が欲しい。どれだけあってもまだ足りないな…

竜也はネロの成長を見ながらも一度己を再確認したのであった。

第一章 日本の食事とUnknown

試合が終わり、竜也とネロとアイシャはギルドの建物内に戻る。そして、アイシャが指示した通りにその中にある相談室に入る。アイシャは別のところで鎧や剣を置いて受付嬢の格好へと着替えて遅れてやって来た。そして、竜也とネロは机を挟んでアイシャと向かい合わせの状態ですわ。ソファに座る。そこからアイシャは質問を始める。

「ふむ、顔合わせも実力査定も行った。人柄もある程度は把握した。後は…そうだな。竜也とネロは泊まる場所はあるのかな？」

「無いです。野宿でもしようかな…って考えてました。」

「じゃあ無いな。今から決めようとは思っていたんだが…そういう口振りから察するに泊めてくれるか、手配をしてくれるのか？」

「そうだ。もし、あったとしたらその場所をあらかじめ聞いておこうと思っていたが…無いならどうする？ここに泊まるか宿に泊まるか。どちらでも良いがここでは食事は出ないのでな。右も左もわからぬならここにすることも良いのだが。ここに泊まるのは宿に比べればただ寝るのみ、という感じだ。どうする？」

「なら、ここに泊まるしかないな。ツテも市場価値もわからない。だから良い宿がとれるかどうかわからない。ネロもそれでいいか？」

「はい。というより、寝る場所を頂ければそれだけでも贅沢です。ありがとうございます。アイシャさん。」

「決まりだな。因みに支部や本部は冒険者なら基本無料で泊まることができる。…のだが、やはり簡易的なものだ。良いものではないことに気を付けてくれ。とはいえ、安心でもあるがな。」

辺境などで宿屋が無い所への応急措置といったところか。もしくはぼったくられたり、嵌められたりして冒険者が使い物にならなくなることを避ける…なんて目的もあるのだろうか？なんにせよ助かるなこの制度は。

竜也は邪推しつつも、その制度に喜ぶ。今日だけでなく常に使える寝床がある、それはかなり安心できる。ネロも同じように考えているようだ。その様子に不思議そうに思ったのだろう、アイシャが

「ふむ、不思議なものだな。普通冒険者というものは己の身を賭して日銭を稼ぐ。故に金があれば、贅沢に使うことが大半だ。それに比べ君達は浪費する様子ではなく、堅実だ。特に竜也。君程の実力者なら普通は驕つても不思議ではない。なのに、驕りは微塵も感じられなかった。もし機会があれば、君の話も聞いてみたいものだ。」

と言う。確かに普通ならそうかもしれない。竜也が表社会で生きていたならそう思ったのかもしれない。だが、裏社会で生きていた竜也は安全・安定の価値がどれだけ計り知れないものかを知っている。まあ、話す必要は無いだろう。そう竜也は考えながらアイシヤの話を聞いている。ネロもまた、真剣にアイシヤの話を聞いている。

「因みに冒険者ギルドから外に出るとすぐに様々な店が並んでいるよ。商魂逞しいとは正にこのことだな。商人同士で常に鎬を削っているようだ。だから、食事に困ったりぼったくられたりする、ということはまあ無いだろう。それと寝た後は寝具を洗う、なんてことは考えなくてもいい。してくれば助かりはするが、そこで時間を取ったりするよりは依頼をこなしてくれる方が我々にとつて儲けが大きいのでな。後、もし何かあったら私やギルド員に相談してくれ。」

と、アイシヤは色々な捕捉をしてくれる。そして、一通り説明を受けて、話は終わった。

竜也とネロは食事するために町に繰り出す。盗賊のことで避難していた商人はもう既に戻って商売を始めている。商魂逞しいことだ。人の往来も活発に戻っている。活力に満ち満ちている。食事処だけではなく、装飾品店や雑貨屋に服屋もある。素材買い取り、売り出しなんてのぼりを掲げた素材屋まであるようだ。

もしかして、アイシヤは商人に戻るまでは何も買えないと踏んで先に所用や説明を済ませたのか？流石と言うべきかなんというか。後、飯のために町に繰り出したが…ネロの服を調べてやらないといけない。流石に麻の服をそのまま、という訳にもいかないしな。幸いまだ時間があるし、馬を売って得た金もあるな。まあ、先ずは飯だな。恐らく時刻としては午後3時程。腹拵えをしないと出る力も出な

いだろう、と竜也は他にも色々考えながら食事処に入る。店の中は木材と石材を使ったまさしく中世ヨーロッパの食堂といった感じだ。「よく来たな！竜也とネロといったか。盗賊を倒してくれたんだって？やるじゃねえか！おまけしてやる！ほら、食ってけ食ってけ！」店の店主らしき男が好意的に話し掛けてくる。どうやらあの短時間でアイシャは通達までもこなしていたようだ。有能さがよくわかる。

「店主、お勧めをくれないか？二人前で頼む。」

「あいよ！お勧めなら唐揚げ定食だな！旨いのを食わせてやる！」

唐揚げ定食だと？いやいや待て待て。異世界に偶然そんな呼び名のものがあったんだろう。おかしいことは無いはずだ。大丈夫…

数分後、その唐揚げ定食とやらが出てくる。その定食に竜也は訝しむ。間違いなくそれは日本でもあった唐揚げ定食だったからだ。味噌汁や、箸までもある。唐揚げの量や飯の量が半端では無かったが。「どうだ、旨そうだろう。さあ、食いな！」

気前よく主人は言う。ネロは目を輝かせている。そして、箸と共に置いてあるフォークやスプーンで食事を始める。

まあ、食ってから聞いてみるか。それにしても旨そう、いや旨いのか。間違いなく日本の料理を知っているとは思いがな、これは…

そう思いつつ、箸で竜也も食べ始める。

黄金のような唐揚げはその大きさからもよくわかる、肉厚さとそれを包み込むサクサクとした衣の食感。丁寧に付けられた醤油ベースの下味。ニンニクも混じったそのジューシーな味と溢れる肉汁。

茶碗によそわれているその白米は雪のような白さがあり、そして出来立てであることを示す湯気が上品に立ち上る。そして、一口食べてみればふつくらとした、それでいてベタつかず固くなく滑らかともいえる口触りで、それが如何に適切な水分量で適切な温度で炊きあげられたかを物語る。

そして味噌汁は濃すぎず薄すぎもしないで溶かされている味噌としっかりと出汁をとったことによる僅かに上品に隠れて香る海鮮の旨味の二重奏。そしてそれに入れられた具は豆腐にキノコに葱と

様々な食感が味噌汁の奥深さを深めていく。崩れずにしつかりとしたままの豆腐。味噌汁と相乗し、味の引き立つキノコ。そして、それらを引き締めつつ食感を楽しませる刻み葱。組み合わせられた味がお互いを高めることで生まれる旨味。

付け合わせである漬物や山菜も瑞瑞しい上にさっぱりとした味で唐揚げの重さを中和する。

完成されているといえる組み合わせ。完成されている各々の一品。その旨さ。

竜也とネロが大量にあつたそれをすぐに完食してしまうのも無理はない。それ程に旨かった。完璧だった。下手をすれば、日本のものより…いや、当然だ。なにせ、創意工夫と信念を持って料理された出来立ての品々。日本でそこら辺に売っていた弁当とは比べ物にならない。いや、比べてはいけない。それだけに、竜也とネロは途轍もない満足感と幸福感を感じた。特にネロは今までにないくらいの満面の可愛く美しい笑顔だ。店主はその様子を見て満足げに話し掛ける。

「どうだ？竜也とネロ。旨かったろう。因みにお代はこの量なら一人8銀50銅貨…ってところなんだが盗賊を倒してくれたサービスってことで二人ともタダにするぜ。これからも最良にしてくれ！」

「はい、とても美味しかったです！ありがとうございます！」
店主は気前よく、そして商魂逞しく笑っている。ネロは店主に丁寧にお辞儀までしている。

「ああ、旨かった。これからも通いたくなくなってしまふほどにな。ところで店主、この料理はどうやって知ったんだ？」

そして、竜也は店主の腕前を褒めながらも気になったことを聞く。当然だ。気にならない方がおかしいというものだ。その質問に店主は

「ん？これか？ヒノモトって国から渡ってくる料理でな。ある名前も知らない旅人が教えてくれたんだが俺はこれらの料理に惚れたんだ。だから、俺はこれらの料理を作ったのさ。」

と、今度は商人ではなく料理人としての顔を見せて言う。旨いわけ

だ。ただ売るだけではなく、研究して意思を、自信を持って売り出すのだから。

それにしても、教えた旅人って奴が気になるな……。明らかに日本のものそのものだ。しかも、教えることができるのか。とはいえ、名前も知らないならどこに行ったかもわからない。今はまだわからないまままで置いておくしかないな……。

竜也は謎の旅人のその後が気になったがこれ以上は聞いても無駄だと理解して、その話を切り上げて、店主に感謝を述べる。

「わかった。ありがとう店主。また来る。その時もまたこんな旨い料理を頼む。」

「当然だ！旨い料理を出すのが料理人の矜持ってもんだからな！いつでも食いに来い！」

そして、竜也とネロは食事処から出る。その後、服屋でネロの麻の服をすっかりとした布の衣服に変えたり靴を履かせたりする。今までにみすぼらしい感じの美少年が綺麗な身なりへと姿を変えた美少年へと変わり、店員や道を行く女性が思わずネロを見ている。見惚れている。それ程に美しくなったネロと共に竜也も服を変える。

自分の服装はカチコむ時の動きやすいメンズスーツで、この世界では違和感がある、と竜也は思っていたのだがそうでもなかったように、変えられるのですか？と店員に聞かれた。中世とも近世ともとれる服に着替えて、金を払い、店から出る。

因みにだが、竜也は間違いなく二枚目で、男前である上に服から垣間見える美しく鍛え上げられたしなやかで強靱な肉体のせいで、女性達が思わず振り返って見てしまったり、見惚れていたりと、更には鼻血を流していたりと、女性の注目的ではあったが、慣れていたので竜也は気にも留めなかった。

第二章 初依頼と初心者冒険団

ラズー口の町。竜也とネロはその冒険者ギルドで寝泊まりしたためにすぐに受付嬢のアイシャと出会う。アイシャは二人に尋ねる。

「おはよう、よく眠れたか？」

「まあまあだな。」

「はい、よく眠れました。」

アイシャに竜也とネロはそれぞれに答える。その様子を見てアイシャは笑みを見せながら

「それは良かった。」

と言う。その笑顔の美しさは偶然通りすがったギルド職員が思わず見惚れている程だ。

それは置いておいて竜也は聞く。

「さて、今日から働くわけだが、まずなにをすればいいんだ？」

「そうだな…まずは他のチームと組んで依頼をこなしてもらおうつもりだ。とはいえ、ネロは丸腰だな…まあ、武器も貸し出せる。報酬は減るが、適した武器を選ぶにはちょうどいいだろう？」

「そうだな。ネロはなにも武器が無い。その上に適した装備がわからない。ここは、貸し出してもらおう方がいいな。チームで組むと聞いていたから今日は適した武器を遠くから考えてもらおうと思っていたが、渡りに船だ。そうしよう。」

「そうだったのか。なら、そうだな。まずはオーソドックスにショートソードとライトシールドなんてのは…」

などと二人で相談しているところに、ネロは割って入り、自分の要望を話した。

「僕は竜也さんと同じのがいいです！竜也さんと肩を並べられる程に強くなりたい！」

どうやら、ネロは竜也と同じように刀が使いたいようだ。その熱意に対してアイシャが覚悟を確かめる。

「刀はかなり難しいぞ？確かに対人戦闘には向いている。だが、動物、ましてや魔物との戦闘には、片刃でしかないことや、両手持ちの武器

故に防御が難しい、そしてソード類とは違って細いために横からの衝撃で折れやすいなどというデメリットがある。冒険者にとつては玄人が扱う武器だと言える。それでも使うと言うのか？危険だぞ？」

半ば警告にも近い言葉にネロは自信を持って答える。

「はい、使います！竜也さんに近づくには竜也さんと同じようにするのが一番速いです！僕はそのつもりで冒険者になったんです！」

「成る程、初めからそのつもりだったか。ならいいがな。とはいえ、気を付けて扱えよ。刀で貸し出すものに業物は無いが、それでも値は張る。折れれば20金貨払って買い取ってもらわねばならん。これから依頼するものは報酬としては一人2金貨30銀貨なんだ。折れれば最悪借金かもしれんからな。まあ、折れなければそんなことはないがな。」

笑いながらアイシャは言う。アイシャの言うその値にネロは少し震える。が、それでも尚刀を練習するようだ。そして、ネロは冒険者ギルドから刀を借り受ける。そんな中で竜也は依頼内容を聞く。

「依頼はどんなものだ？ここら辺の依頼で採集、なんてものは無いだろう？護衛か討伐か、どちらかだと思っただが。」

「正解だ。鋭いのだな。ここら辺りは盗賊などを除けば基本的には危険度は相当に低い。なにせ港市。そんなところの安全確保は国も表立ってやらねばならんからな。依頼内容は討伐だ。まあまあ遠いのだが、ここから北東の位置に森がある。そこでかなり猪が繁殖しているな。採集がしにくくなるから10〜20頭程討伐してくれ、のとどだ。」

猪という魔物と比べ危険性が低そうな相手に竜也はアイシャに思ったことを口にする。

「猪？それは狩人の範囲なんじゃないのか？それともなにか厄介なことでもあるのか？」

「その森はだな、通称魔物の森モンスターフォレストというのだ。猪だけでなく、その血に引き寄せられて狼だけでなく昆虫や植物の魔物、その他にも色々集まってくるのだ。とはいえ、猪に引き付けられる上に生きている猪を襲わずに死肉に群がるような低級のものが多いためにそこまで危険

でもないのだが…」

「成る程。確かに狩人は計算して狩りをするからな。だから、不安定要素が多すぎる上に、仕留めた獲物に群がる奴らが多すぎるために、安全に生計が立てにくい…というわけだな。」

「そういうことだ。最深奥にはダンジョンに通ずる入り口があるためにモンスターもそこそこだが、今回はそこまでいくわけでもないし、ダンジョンに近い魔物もそんなに強いわけではない。例外もいるにはいるが、正直に言って初心者向けの場所だ。とはいえ、猪を獲ろうとは考えない方がいい。猪を獲る場合は難易度が桁違いだ。全ての魔物に襲われるからな。それだけは頭に留めておけば、万が一傷を負っても生還することはできるさ。」

「わかった。この依頼、受けることにする。ところで、組むチームのメンバーはいつ来るんだ？どんな奴らかも知っておきたい。」

「もうすぐ来る。グループの名はフォーナム。君らと同じ銅級が3人に青銅級が2人の計5人。前衛2人にサポート1人、後衛が2人だな。君達を合わせるとまあまあ充実したパーティーと言える。後、彼らは魔物の森を何回か訪れているから土地勘もある。大丈夫だろうと思うパーティーメンバーだ。」

「用意周到だな。こちらでも安心できる。期待に応えさせてもらおう。」
そんなこんなでアイシャと竜也が話し合っていると、冒険者グループがやってきた。組むメンバーだろう。男2人と女3人が挨拶をしてくる。

「よろしくお願いしまつす！フォーナムです！自分は前衛でロングソードとシールドを使います！名前はタロス・ストラムつす！」
「同じく前衛で槍を使う。俺の名前はペルーナム・エスト。よろしく。」

「私は後衛のサヘル・トリトル！水魔法が使えるの！わあくイケメンと美少年と一緒になんてついてるっ！よろしくねっ！」

「私も後衛のトリンドル・ラーナム。弓を使う。…よろしく。」

「俺はサポートのドンモ・モンモです。素材回収、メンバー回収、トランプ設置に解除に治療に強化になんでもござれ。よろしくお願い

します。」

「俺は竜也。使うのは刀だ。よろしく頼む。」

「ネロ・ブレーヴァです。僕も刀です。竜也さんを目指してます。よろしく願います。」

お互いに自分の武器ないしは役割を知らせて挨拶を終える。トリンドルとドンモが青銅級で他は全員銅級というビギナーズチームだ。その様子を見ながらアイシャは

「君達には期待している。特に竜也。君は私を負かす程の実力と油断のないその心構え。余程のことが無い限り、万が一もないだろう。頑張ってきてくれ。」

と、後押ししてくれた。その激励に対して皆がアイシャに返礼し、そしてラズーロの町を出発する。森まで徒歩で1時間程。そこまで遠くはない。竜也とネロは目的地に向かってフォーナムと共に歩いている最中、そのメンバーに話し掛けられる。竜也もネロもそれに答える。

「竜也つて凄いのね！あのアイシャさんに勝つなんて！」

「ああ、あのアイシャ殿に勝てるのはあの町にはおらなんだというのに。」

「超期待のルーキーじゃないっすか！自分達なんて歯が立たなかったんすよねえ…あははは。」

「ああ、そのことか。アイシャが後から大剣は楽しむ為に持ってきたとか言ってたな。間違いなく戦闘^{バトル}狂だ。鍛えてなかったのなら勝てる筈のない相手に違くないさ。」

「えっ？大剣？本気じゃなかったのか、あれで…強すぎだろう…」

「…大剣を使った人なんて初めて聞いた。」

「本当に強いですよ、アイシャさん。僕もアイシャさんと押し合いして崩されちゃって負けました…でも次はもつと強くなります！」

「…アイシャ殿は肉体強化^{パワーアップ}のスキルなのにそれと互角とはネロも相当なのだな。」

「ええ!?そんな身体なのに力で互角!?二人共期待されるわけね…」

などと、話している内に森に着いた。見れば、そこまでなら遜色

のない至って普通の森だ。只違うのは、明らかに生物の気配が濃厚。至るところに痕跡がある。小鳥なども相当いる。豊かということを雄弁に語るその森から突然。

猪と言うよりは魔物と言った方が適切なような巨大な猪が出てきたのだった。

第二章 遭遇と一期一会

いきなり巨大な猪がのそのそと森から出てくる。全長3メートル程ありそうなその猪はこちらを見掛けるやいなや睥睨してくる。戦闘体制に入ったようだ。こいつは明らかに主レベルではないのか!? これはいきなり運が…

「自分達いきなり運がいいっすね! ビッグボアっすか! ラッキー♪」

「竜也達! 狩るぞ! 肉が旨いんだ!」

「…しかも、有用。ホントに幸運。」

…どうやら、そこまで強くない相手のようだ。というよりむしろ彼らの反応からして冒険者のカモという感じがする。いや、油断してはいけないだろう。

すぐさま竜也は身体を屈めて大地を蹴り、一瞬間の内に距離を詰める。殺られる前に殺ってしまえばいい。虎桜での居合抜き一閃――

上体を捻る。大地を蹴って生み出した推進力を利用する。刀の鞘を後ろに飛ばす様に刀身を抜き出す。勢いそのままに下から上へと斬り上げる。その斬撃は難なくビッグボアの脳天ごと頭を縦一文字に斬り裂いた。その刀傷から血を噴出しながらビッグボアはズズズンと大きな音を轟かせつつ横たわる。

初めての魔物との戦闘は呆気なく終了した。あまりにも手応えが無さすぎる。

普通、身体が巨大な生物というのは大きさに比例し筋繊維密度と骨密度が上昇する。その上、猪などの獣は毛などが斬撃などの阻害をするためにナマクラなどでは傷一つ付けられない。与えられたとしても、刀傷ではなく打撲。それくらい、相性が悪い筈だ…この世界はこれが普通なのか? それとも…

竜也は思わず訝しむ。それくらいに猪は弱すぎた。刀を鞘に納めて後ろを見てみると、フォーナム達は驚いている。

「かつこいいっすねえ…! 一刀両断は剣士の夢なんすよねえ…!」

「流石はアイシャ殿を負かした者だ。銀級以上の実力を持つのは間違

いないな。」

「竜也さんは凄いですよ！もつともつと！」

…どうやら、ビッグボアを一刀両断できるものは実力者ではあるのだが、珍しい程度で有り得ないものではないらしい。そして冒険者の実力は魔物の強さで測るのではなく、技量で測る。そんな感じが見てとれる。それと竜也の技術を再度見て、ネロはかなりはしゃいでいる。竜也は一応聞いてみることにした。

「なあ、ビッグボアは弱いのか？」

「そうっすねえ…確かに丸腰なら難しいっすけど、武器があれば、誰でもある程度は渡り合えると思うっすよ。」

「ビッグボアはビギナーズモンスターだと言えます。その割には得られるものも多いので、ボーナスマンスターとも言われてますね。」

「肉が美味しいし、牙も皮も、というより全てに使い途があるのよねえ。だからこれ一頭で10金貨くらい稼げるの。」

フォーナム達はビッグボアについて解説してくれる。後、彼らの目付きがどう考えても食事を目の前にする子供のそれだ。タロスに至っては女性にはあるまじき涎を口から垂らしてそれを拭うという行為をしている。

「…持って帰って豚カツにでもしてもらおうとか。絶対美味しい。」

と、寡黙なトリンドルまでもがそう言っている。ネロもそれを聞いて目を輝かせているが…

いや、待て。アイシャに言われたことを思い出す。

「いや、皆待て。猪を持って帰るのは危ないのではなかったか？しかもかなり巨大だ。流石に危険を冒すのは良くないと思うが。」

そうだ、死んだ猪を狙って群がってくる奴らがいる筈だ。そもそも、こんな大きな獲物を持って帰るのは難しいだろう。

それに対しフォーナム達は、

「ビッグボアは大丈夫よ。危ないのは猪だけ。ビッグボアの場合は死肉に群がる奴らも強くなるから雑魚は寄ってこないの。ここは入り口だから、魔物が寄ってくる心配はないわ。」

「後、私とサヘルは収納袋のスキルを持っています。まあ、一般的なス

キルではありませんが：だから、獲物の持ち運びについては大丈夫ですね。流石に猪は回収するリスクに見合いませんが。」

と、更に説明してくれた。成る程、魔物の中でも生態系が作られていて、それに基づいて魔物も生き物も生活しているのか。なかなか面白い構造になっているようだ。

「成る程、よくわかった。ありがとう。」

竜也は答えてくれたフォーナムに礼を言う。そうこうしている内に、フォーナム達はビッグボアの血抜きを終えて解体してゆく。竜也もネロも解体を手伝う。そして、ビッグボアを牙・皮・骨・肉・内臓、そして少量の血に解体し、収納袋というスキルを用いて何も無い筈の空間にしまっていく。消えるように素材が仕舞われていき、完全に仕舞い終わる。そして、

「洗^{クリーン}浄！」

解体した後をサヘルが手慣れた様子で水魔法を用いて血痕を消していく。恐ろしく便利だ。

血痕を消す、つてのは抹殺に使えるな：おっと、この世界じゃあ抹殺とかはいらないな。流石に抹殺する必要のあるような外道は仲間にはいないだろう。

その様子を見て竜也は物騒なことを考える。昨日竜也は既に山賊達を抹殺しているが。そんなことは気にせず、竜也達は森の中に入っていく。

森の中は、かなり明るいものだった。林冠の葉の合間から射し込む光が森の中を明るくしている。そして、木は巨木が多い。まるで、何百年も生きているような古の樹木が乱立しており、森の歴史を感じさせる。倒木もあり、まさしく豊かな森と言えるだろう。そして、やはり入り口同様に生物、魔物のものらしき痕跡がそこかしこに存在する。

ガサガサガサ：ズルズル：ゴソゴソ：

前方の草むらから蠢く音がする。生き物かそれとも魔物か。それとも猪ターゲットか。

竜也達は各々武器を構える。そして、警戒を強めていく：

そして出てきたのは狼だった。尾がかなり刺々しくそして身体に見えわず大きい。普通の大人の狼くらいの大きさはあるのだが、目が丸い。どうやら子供のようなだ。

なんだろうこいつ。なんか親近感が湧くな。なにか、飼いだの様なうん、一期一会かもしれないな。よし。

竜也は即断し、フォーナムのメンバー達に掛け合う。

「なあ、ビッグボアの肉を取り出してくれないか？ちよつとこいつを手懐けてみたくなった。」

そんな提案にフォーナム達は怪訝な、それでいて、明らかに警戒を強めた顔で答える。

「本気で言ってるんですか…？あいつはこの森の主である牙狼ランドウルフですよ？なんでここにいるかもわからないのに…」

そう言いながらもドンモがビッグボアの肉を空間から取り出して渡してくれる。しかし、その手には少し冷や汗があり、そして、かなり慎重な手つきである。

…本気で言っているのか？こいつがこの森の主？子供の狼だし、手懐けてみたくなる程の親近感が湧くのだが。

なんてことを考えつつも狼の方を向く。隙はない。野性に生きる感じがひしひしと伝わってくる。正に狼である。竜也がビッグボアの肉を持っているからか、警戒しつつ寄ってくる。可愛らしい。なにか、子供の純粋さを感じさせる。空腹に耐えられないで、思わず飯に寄ってくるような…

竜也は屈んでビッグボアの肉をランドウルフの目の前にゆつくりと差し出す。ランドウルフは肉の匂いをしきりに嗅いでいる。警戒しているのが伝わってくる。そして、安全だとわかったのか、一口食べる。咀嚼して呑み込む。そして、旨かったのか、パアアという音が聞こえてきそうな程の良い笑顔を見せて、そして、竜也が手にもつビッグボアの肉に齧り付く。ガフガフと音が聞こえる。可愛い。がつつくランドウルフの頭を撫でながら肉を食べさせる。

恐らくだが、食事をするためにここまで来ていたようだ。もしかしたら、ビッグボアが森から出てきたのもそのせいかもしれない。食

べ終えて、満足したのか、竜也の周りを嬉しそうにクルクルと回り、そして何周かした後、竜也の目の前にお座りする。本当に可愛い。頭と喉をしきりに撫でてやると目を細めている。喜んでいようだ。

「俺と一緒に来るか？」

という竜也の問いかけにランドウルフは一声吼えて同意を伝える。本っ当に可愛い。

「はあく。あのランドウルフを手懐けてしまうなんてねえ。」

「餌付けしようという考えが先ず無いっすよねえ。怖いっすもん。怖いもん知らずっすねえ竜也は。」

「いやはや、それにしてもビッグボアを狩っておいて良かった良かった。戦力強化が見込めるとはな。」

「いやいや、先ず普通ならそんな考えに至らないでしょう。竜也さんが居てて本当に良かったですよ。」

「その狼さんは怖くてかっこいいですね。竜也さん。」

そんな竜也を見てフォーナム達は冷や汗を拭いながら口々に話している。どうやらこの狼、相当な実力者であるらしく、ネロも少々怖いらしい。

それにしてもこの狼は怖いか？明らかに可愛らしいと思うのだが、もしかしてそこら辺の美的感覚がズレているのか？

そんなことを考える竜也であった。

第二章 猪狩りと第二の相棒

竜也は牙^{ランドウルフ}狼の子供を手懐けたのだが、こいつは本当に愛嬌がある。なにせ、ねだるようにこちらを向いてその刺々しく大きな尾をぶんぶんと嬉しそうに振っている。遊んで！という声が聞こえそうなくらいにだ。それをフォーナム達は少し怖がっていた。なので、気になつて評価を聞いてみることにしたのだが…

「ランドウルフってそんなに襲い掛かつてはこないんですが…襲い掛かられたならば死を覚悟しろ、と言われるくらいには危険ですよ。」
「例え子供でもランドウルフは手を出しちゃいけないですよ。まず勝てないです。そして、可愛いというよりかっこいい、じゃないですか？」

「…普通あそこはお互いゆっくり離れる。関わらないのが正解。」
などと、先程のビッグボアとは正反対の答えが帰ってきた。竜也はそこからやはり、かなり感覚が世間一般とズレていることをハッキリと理解できた。強いと思っていた魔物はボーナスモンスターで、弱く可愛いと思っていた魔物は裏ボスという。

そんな、ギャップをひしひしと竜也は感じつつもランドウルフを見る。そういえば、名付けを忘れていたな。…そうだな。なら、
「そうだ、こいつの名前はフェンラルとするか。魔狼フェンリルと一字違いつてことだな。」

「フェンラルですか。よろしくお願いしますね、フェンラル。」

ネロはすぐに仲間と認識を改めてランドウルフ改めフェンラルに挨拶する。それに続いてフォーナム達も挨拶をする。仲間ができて嬉しいのかフェンラルは少し高く吼える。

…恐らくこいつは独り子なのかもしれない。それにしてもフェンリルからもじるのはやり過ぎたかもしれんな。まあ、いいか。

竜也はそんなことを考えるもすぐに切り替える。フェンラルを仲間にしたのはいいが、元の目的の依頼が何も達成できていないからだ。

フェンラルをパーティーメンバーに加えて、森の中を進んでいく。

勿論、前衛が後衛を庇いながらの状態を維持し続けるのを意識して。フェンラルもそれを察したのかすぐに先頭に立ち索敵しながら進んでいく。

そして、森の中で少し開けたところに出る前に全員が立ち止まり、岩や倒木などの障害物に身を隠しながら場所を見る。

そこには、猪の群れが居た。しかも、5〜6頭程のものではない、20頭以上の巨大な群れ。中には瓜坊すら居る。瓜坊は対象ターゲットではないために逃すことにはなるだろうが。確かにこれだけ猪がいたら、採集の邪魔にもなるだろう。それどころか、採集する目的のものまで喰い尽くされてもおかしくはない。これは間引いてやる必要性が高い。

先ず牽制し、猪がこちらに突進してくるよう仕向けるためにトリンドルが矢を放つ。木の弓矢だが、引き絞られて射られたそれは、的確にそして鋭く最奥の猪の目と鼻の先に突き刺さる。相当に難しい、ほんの少しの落下計算と精密射撃を混ぜた一矢をトリンドルは成功させる。それに猪達は驚き、こちらへと鬼気迫る勢いで突進してくる。

そして猪達はその突進のままにドンモがあらかじめ掘っておいた即興の落とし穴に落ちていく。即興というところがミソだ。瓜坊達はそんなに速く突進できない。故に落とし穴が猪で埋まるまでは瓜坊達が辿り着くことは無いのだ。浅くは無いが即興の為に深くもない落とし穴であるからこそ、生態系を完全に破壊せずに済む、というわけだ。

勿論、欠点がある。猪達はそんな即興程度の簡単な落とし穴では猪自身の膂力で抜け出してしまう。だが、落として捕らえることが目的ではない。駆除が目的なのだから、突進の勢いが殺されてもたついている時間を作り出すことこそが目的だ。猪達自身がお互いに突進し合っすらいる。

そんなところに、タロスがロングソードを、ペルーナムが槍を振るいながら

「やあああああっー！」

「せやああああっ！」

掛け声と共に猪達を攻撃していく。

斬撃。突き。斬り払い。袈裟斬り。斬り上げ。斬り下ろし。斬りかかり。シールドバツシュ。

突き。薙ぎ払い。三段突き。足払い。薙ぎ下ろし。突き上げ。突き落とし。突進突き。

見る見る内に猪達は狩られてゆく。猪達は鮮血を巻き上げ、骨を折り、悲鳴をあげて、そして息絶える。

竜也は一刀両断。ネロはタロスとペルーナムを見習い、我武者羅に。フェンラルは恐ろしい速度で喉元を噛み千切ったり、爪で切断。トリンドルは眉間に矢を射込む。

「雨槍！」

サヘルは水魔法で。ドンモは短刀で喉元や心臓を一突きに。そして、狩りは1分程度で終了を迎えた。

「洗淨！」

すぐにサヘルは魔法を詠唱し、身体や装備に付いた血を洗い流す。血の匂いを嗅ぎ付けて魔物が寄ってくるのを防ぎ、危険度を下げためだ。

瓜坊達は惨劇を見て、逆側に逃げたようだった。ドンモは駆除の証拠として猪の牙を集めている。タロスとペルーナムは周りを警戒し、見張っている。魔物が現れたら対応できるように動いているのだ。ネロも竜也も周りを見張る。フェンラルは狩った猪を一匹頂戴して嬉しそうに旨そうに食べている。

剥ぎ取りの最中終始魔物の出現を警戒していたが、魔物は一匹たりとも現れなかった。それでふと竜也はフェンラルの呑気な様子を見てあることに気づき、それを皆に知らせる。

「フェンラルは確か食物連鎖の最上位に位置していたな。もしかしてそれを畏れて魔物が寄ってこないのではないか？」

確かビッグボアは死んだとしても低級の魔物は寄ってこない。それほどに厳格な食物連鎖があるのだ。今はフェンラルがいるから、猪の肉を喰いたくても喰いにこれないのだろう。周りの気配が遠ざ

かっている感じがするのだ。それにドンモも気づいて

「かなり、特別な状況ですね…よし、なら猪を持って帰りましょうか。この猪は旨いと評判なんですよ。なにせ豊かな森ですからね。とはいえ、本来は危険度に見合っていないなかつたのですが…今日は本当にツイてますね。」

と、言いながらテキパキと解体を進める。それを見て、タロスとペルーナムも解体に加わり、血抜きをすぐにし終えて解体していく。そして、計23頭の解体が終わり、ドンモとサヘルの収納袋にテキパキと仕舞われていく。サヘルが洗浄した後でしっかりと対象ターゲットの駆除の証を確認する。しっかりと数量があることが確認できた。ホクホク顔のフォーナム達を見つつ、目的も達成したためにこれ以上長居する必要も無いので、また隊形を維持して警戒しながら引き上げていく。しかしフェンラルがいるからか、魔物との遭遇も無しに森を抜けることができた。

そして、森からラズーロの町まで歩いて帰る。その最中も特になにもなかった。あつたとすれば、タロスが豪快に腹を鳴らし、タハハと照れ臭そうに笑っていたことぐらいだ。

ラズーロの町に戻って、早速ギルドに報告に行く。町に入ってから、チラチラとフェンラルを見ている者が多数見受けられたが当然だろう。

ギルド内に入ると午後3時程。朝飯と昼飯は移動の合間に携帯食を歩いて食べてはいたのだが、やはり、腹に入れるのを目的にしていたせいかな、竜也とフェンラル以外は腹を鳴らすという相当に間抜けな状態を作り出していた。

とはいえ、報告はしっかりしなければならぬのでギルド職員に取り次ぐ。ギルド職員はフェンラルの方を見て、驚きを隠せないままに、アイシャを呼んで来た。アイシャは報告を聞く前にこちらのフェンラルを見て、少し驚いているようだ。そして、恐る恐る聞いてきた。「…うむ、私の見間違えで無ければ幼体の牙ラドウルフ狼が君達の後ろについてきているわけなのだが…どういふことか説明してくれるな?」

「ああ、フエンラルのことか。ビッグボアの肉をやったら喜んでついてきた。猪狩りも手伝ってくれた。しかもこいつのお陰で猪肉まで手に入ってたな。一期一会とはやはりいいものだな。」

その竜也のあつけらんとした答えにアイシヤはほんの一瞬間だけ完全に呆けた。そして、徐々に笑いだす。

「……フフフフ、ハハハハハ！まさか牙ランドウルフ狼ティムを懐柔してくるとは思わなかったよ！君は私が冒険者人生を諦める切っ掛けになった魔物を初めてティムの依頼で懐柔タイムするとはなあ！面白すぎる！気に入った！ハハハハハ！」

アイシヤは腹を抱えて膝まで叩いて笑っている。だが、それほどにこの魔物は、フエンラルは危険だったようだ。まあ、もう竜也の第二の相棒なのだが。

そして、依頼の報告で猪駆除の証を引き渡し、それぞれが2金貨30銀貨を受け取った。今回は大成功だなど思いつつ竜也はフエンラルを見る。これから頼りになるだろう、相棒を見つけたことに最上級の嬉しさを感じる竜也だった。

第二章 良縁と食卓

依頼完了の報告を済ませた竜也達とフォーナム達はその後軽く軽食を摂る。流石は港町ラズロ口といったところで、手軽に食べることのできる焼串や干し肉、お握りまで売っていた。それらに舌鼓を打つ。

ある程度腹ごしらえをしたところで、また、冒険者ギルドに戻り、今度はギルドの買い取りや斡旋をこなしている職員に話し掛ける。

買い取りをしてもらうために、サヘルとドンモが収納袋からビッグボア1頭と猪23頭分の素材や肉を取り出した。鮮度や状態が変化していないことが見てとれる。どうやら収納袋は相当に便利なスキルのようだ。ギルド職員は戦利品の量に驚いている。

「はあく魔物の森産のビッグボアや猪はそこまで珍しくもありませんが、猪が23頭分ですか…今までこんな量の一斉納品は2、3度ぐらいしかありませんでしたよ。これはまた、忙しくなりそうですねえ。」

「値段はどれくらいになるんだ？」

「そうですねえ。ビッグボアは9金貨50銀貨ですが何分猪はねえ…。魔物の森《モンスターフォレスト》産なら一頭3金貨20銀貨、23頭なら73金貨60銀貨。合わせて83金貨10銀貨ってところですよ。」

「かなりの額だな。相当しつかりと値を付けてくれているようだな。」

「よし、77金貨払ってくれないか？」

「いいんですか？5金貨10銀貨分損しますよ？」

「いいんだ。これだけ稼いだのも運が良かった、というのと適正に買い取ってくれようとしてくれているからだ。だから、関係作りとして受け取ってくれ。後は7人で割り切るには77金貨がちょうど良い。ちょうど一人11金貨だ。不和を生まないための協力とも考えてくれれば良い。皆もそれでいいな？」

「まあ、竜也さんがおまけを稼いでくれたようなもんっすから全然いいっすよー！」

「そうだな。むしろ、我々の方が倍以上受け取るのが少し恥ずかしいくらいなのだがいいのか？」

「そんなに貰えるなんて嬉しいな。私達は必要分は既に貰えているからね。」

「…竜也の考えならそれでいい。」

「竜也さんは太っ腹ですね。ありがとうございます。」

「だそうだ。ということに頼めるか？」

「わかりました。ありがとうございます。では、お受け取り致します。」

「はい、こちらが代金の77金貨です。ご確認の上お受け取りください。」

素材や肉の代わりに金貨を支払い、ギルド職員は受け取った素材や肉を収納袋にしまつていく。それを市場に卸すのだから、今日は旨い猪肉が市場に並ぶことだろう。フォーナム達と竜也達はお互いに金貨を公正に分け合う。一人11金貨。依頼料と合わせて今回で一人13金貨20銀貨手に入れたことになる。5〜6回分の依頼料、つまり一週間分くらいの稼ぎ額だ。フォーナムとしての稼ぎなら66金貨。だからだろう、凄くニヤけたりホクホク顔だったりしている。

そういえば、フォーナム達はビッグボアの肉を見て、子供のような食いたそうな目で見ていたな…よし。

「職員さんよ、ビッグボアの肉っていくらする？どこに卸す？教えてください。」

「ビッグボアの肉は結構引く手数多ですからねえ…どこに卸すかはまちまちですね。…ああ、そういうことですか。なら、何キロか良質な部位をお売り致します。まけて頂いたので5キロ50銀貨でお売りしますよ。それを店に持って行って、お代と共に渡せば美味しく頂けるかと。」

「よし、なら10キロ分買う。…1金貨渡したな、よし。フォーナム達、せっかくだから夕食と一緒に食べよう。ビッグボアや旨い飯を奢る、どうだ？」

金貨をギルド職員に払い、ビッグボアの肉を受け取りつつ、フォー

ナム達に話し掛ける。フォーナム達は驚いているようだ。

「ええっ！いいんすか!? 太っ腹つすねえ！あざっす！」

「良いのか？竜也。我らはよく食うぞ？」

「ええええ！本当にイケメンね…いいの？ありがとう！」

「…本当にいいの？やった。」

「では、御厚意に甘えて、御同伴に預らせてもらいます。竜也さん、ありがとうございます。」

「どうやら喜んで承諾してくれたようだ。そして、ギルド職員と別れを告げて、竜也達は以前に唐揚げ定食を食べた食事処に入る。

「へい、らっしやい！おお、竜也とネロじやあねえか！トリンドルまで来てるのかい！今日も来てくれるたあ嬉しいねえ！今日はどうする？」

「いいビッグボアの肉が入ってな。10キロ程だ。これをおやっさんの腕で色々調理してくれねえか？肉が余ったらおやっさんの好きにしてくれ。金貨を1枚銀貨を50枚置いておく。俺も含めてこいつら全員に旨いもんをたらふく食わせてやってくれ。因みに狼もいる。よろしくな。」

「店長さん、今日もよろしくお願いします。」

「かーっ！…ここまでしてくれるとは料理人冥利に尽きるねえ！わかつたぜ！最高に旨いもん食わしてやつから楽しみに待つてなあ！」

と、ビッグボアの肉と代金を受け取るやいなやビッグボアの肉を持って厨房へと向かっていく。皆席について料理を待つのだが、そこへ豚の良質な油や肉の焼ける芳ばしい香りや、調味料の香りが漂ってくる。だからか竜也以外はそわそわしたり、涎を拭いているなど、待ちきれない様子で今か今かと待つている。

「へい、お待ち！まだまだ料理は出すから楽しみに待ちながら食べな！」

そう言うって最初の料理が運ばれてきた。

ビッグボアの石焼き。豪快に大きく焼かれたそれは、焼け石の上でジュウジュウと良質な油を跳ねさせながら、力強く鎮座している。側にはナイフとフォークがついている。ナイフで切り分けると、中に詰

まっていた肉汁を外に溢れさせ、そして相当に肉厚。その上ちようど食べ頃の血色から茶色に変わる合間の焼き目であることを肉の断片から知らせてくる。レア。香りからして、そばにあるつけるソースはおろし醤油のようだな。いわゆる和風ステーキ。

フォーナム達はそれが出てきて机の上に並ぶやいなや、すぐさまナイフで切り分けて、フォークに刺し、その肉片にソースをつけてそして頬張る。

切り分ける大ききで性格が出ているな。タロスとサヘルは不恰好かつ大きな塊を一気に食べる。トリンドルとペルーナムは綺麗に、だが大きな塊だ。ドンモは綺麗かつ適正な大きききに切り分けている。ネロは竜也をまねているのが見てわかる。竜也は綺麗かつ適正な大きききに切り分けている。ドンモと同じ感じだ。ただし、食べる速度はフォーナム達が圧倒的に速い。まるで、消えるかのように肉を平らげていく。

笑顔と真顔が混同した旨いものを食べる時のあの感動と無感動をない交ぜにした顔のままに。

思わず竜也は苦笑する。こんなに良い飯の時間が過ぎせるとは夢にも思っていないかった。元の世界では裏社会にいたからこそ憧れて止まなかった、あの暖かい飯の時間。笑顔と食事。

竜也も肉を食べる。旨い。噛めば噛むほど口の中に肉汁が溢れ、その味にある脂っこさをおろし醤油が中和し、純粋なさっぱりした旨味へと変化させてゆく。肉の濃厚な香りと旨味におろし醤油のさっぱりとした香りと旨味。それらが渾然一体となることで生まれるこの味。

最高。

そう表現するしかない程に旨かった。

それらを堪能していると次々に料理が運ばれてくる。和をベースとし、素材の味を引き出しつつ調味料で整えられた至高の一品の数々。すべてが最高だと言えた。そして、満腹となったことで料理が止まる。

「どうだった？最高だったろう！」

「ああ、最高だった。やはり、あんたと出逢えたのは大当たりだ。これからもよろしく頼む。」

「本当に美味しかったです！店主さん！最高でした！」

竜也と店主は握手をして、お互いを完全に認めて信頼し合う。それ程までに竜也と店主の馬が合ったのだ。店主の料理は研鑽が積み重ねたもので旨いものばかり。竜也もそれをしつかり認めて店主を信頼し、料理人冥利に尽きる依頼をしてくれる。良い仲が築かれない訳がない。ネロもしつかりとお礼を言っている。ネロも店主を完全に認めているようだ。

しかも、フェンラルのこともしつかり見ており、狼が食べても良いような料理を食べさせていたようだ。フェンラル自身も店長に懐いたように、握手している二人の周りをくるくると回っている。

フォーナム達も、

「おやっさん！めっちゃ美味しかったっす！また、自分も食べにくるっす！」

「店主殿よ、美味しかった。また、よろしく頼む。」

「本当に美味しかった！また来ると思うしよろしくね！店主さん！」

「…美味しかった。いつも美味しい。また来る。」

「今日はありがとうございました。店主さん。また、機会があれば、お邪魔させて頂きます。」

と、店主の料理の腕を褒めていた。恐らく彼らはまた来るのだろう。そう、確信できた。トリンドルは元々常連客であったようだが。そして、挨拶をすませて店を出る。店を出てから竜也はフォーナム達に別れを告げる。

「どうだ？旨かったか？今日はありがとうな。初依頼だったから助かった。また次組むときもよろしく頼む。」

「いやいや、こちらこそっす！竜也さんとネロがいたからこそたくさん稼げたし美味しい料理も頂けたし、安全に依頼遂行できたし…また、次に組むときもよろしく頼むっすよ！」

「そうだ。竜也は強い上に賢い。ネロもな。本当に助けられた。できればずっと組んでいて欲しいくらいだ。」

「そうよ！できれば私達フォーナムと組んで欲しいなあ…流石に無理よね。でもまた組むときはよろしくね！」

「…今日は本当に良かった。またね。」

「今日は本当にありがとうございました。竜也さん。ネロ君。貴殿方のこれからが良いものであるようにフォーナム一同願っております。また、組ませて頂くときは、是非よろしくお願い致します。」

こうして、竜也の初依頼は完遂し、フォーナム達と別れた。良い縁が、良い関係が築けたのだろうか。そう竜也は思案しながらネロとフェンラルと共にギルドに戻っていったのだった。

第二章 保身と求婚

竜也とネロがフオーナム達と共に魔物の森の初依頼をこなし、そして相棒となる牙狼ランドウルフフェンラルと出会い、共に歩むことになったその翌日。

竜也はアイシャに事情説明のために朝から呼び出されることになった。

「さて、竜也には昨日のことで詰めておかなければならないことがある。まずは牙狼ランドウルフの懐柔タイムについてだ。既に懐柔タイムの申請は終えているためにそこは気にしなくて良い。問題は別だ。

魔物は生物の一種で、人と共に生きるというケースはかなり多い。ビッグボアなどが良い例だな。後、大抵の魔物は前例があった。だがな、フェンラル、と言ったか。フェンラルについては話が別だ。今ままで牙狼ランドウルフの共生は前例が無かった。此方側でも扱いをどうすれば良いのが全くわからん。その上にだな。」

あのビッグボアは家畜か何かなのか：という竜也の疑問は置き去りだが、アイシャは一呼吸置いて話を更に続ける。

「牙狼ランドウルフは好戦的で無く、頭数も多くな、そしてなにより恐ろしく強いのだ。竜種とは比べるべくも無いのだが、それでも、討伐数が今まで皆無だったのだよ。まあ、人畜無害だからというのも大きい、強さ故に研究したくてもできなかつた、という程の魔物だ。」

かくいう私も、研究のためだと依頼した研究者を引き連れて戦闘したのだが、銀級6人のパーティーで負けたのだ。逃げ出すことは叶ったが、その高い壁を感じた私は今は一線を引いた訳だな。つまりは牙狼は幼体だろうが高い実力を持っていると推測されることと、非常に高い学術的な価値を持っている、ということとはわかつたな？」

つまるところ、研究するから寄越せという高圧的な要求をしてくる馬鹿がいるのかと竜也は呆れる。

「それはつまりフェンラルを差し出せということか？なら断る。そうだな、後は幼体だから強くない訳では無いな。実際魔物の森では食物連鎖の頂点だったからこそ猪を持って帰ることができたからな。」

竜也は皮肉と怒りをこめながら言い放つ。それについてはアイシヤも同意見だったようだ。

「流石に譲渡は竜也でなくとも断るだろうと思つてな。そこら辺は既に断りを入れてある。無闇に手を出せば冒険者ギルドが黙つていなぞ、と脅しを含めてな。だが、それでも諦められぬ者は正規の手順を踏んでくるだろう。譲渡は無くても観察依頼が来るかもしれない。闇の依頼までは流石に無い、と言いたところだが…世の中には馬鹿もいるからな。気をつけて欲しいのだ。」

しかし、これで終わりでも無いのだろう、アイシヤはまだ顔を崩していない。竜也は進める。

「成る程な。後はなにがある？フエンラル以外にも用事があるのだろうか？話してくれ。」

「後は竜也。お前を一挙に銀級まで引き上げねばならなくなった。普段なら絶対無いことなのだが…」

今度は特例昇格の話である。有り得ないと散々聞かされていたが、らされるということは理由がある。つまりそれは、

「フエンラルが絡んでるな？これ程の魔物を懐柔テイムさせたとなれば、引き抜きを考えるものが出てくる。その時に銅や青銅級では守りきることが叶わない可能性があり、それを未然に防ぐための処置だ、というところか。」

しかし、懐柔テイムしたことで実力が評価されたから昇格できる、というのなら評価は信用によるものという元々の定義はどこにいったんだ？

もつともだ。信用されるのは簡単ではない。依頼一回程度で信用が築かれはしないと知っていた竜也にアイシヤが例外の理由を答える。

「…知らなかっただろうが懐柔テイムの難易度は最上級だ。普通は経験と勘と地の理と実力と用意が無ければ不可能。故に懐柔テイムできるのは銀級相当以上で無いと可能性すら無い。それを竜也はこなしてしまったんだ。相応の評価が理念であるなら、引き上げねば不評不満が出る可能性もあるだろう。」

しかし、そんな特別扱いされれば必ず起きる弊害がある。その懸念を竜也は危ぶむ。

「出る杭は打たれる、というのがあがるが、それを無視できる程に冒険者ギルドは評価基準が信頼されているのか？ 本当に大丈夫と言えるのか？」

しかし、アイシャはそれについて動じていない。いや、動じる必要はない、と言わんばかりだ。

「ああ、それについては大丈夫だ。冒険者ならむしろそれ程までに力があるのだから、パーティーを組みたいと申し出る者が出てくると思う。それとはまた似たようで違うところが問題点でな。」

別のところでアイシャは眉を顰める。問題点は竜也の元々の予想とは違う。とはいえ、後に残るのは…

「ああ、今度は等級維持が面倒臭いことになるのか。ネロと組む、つまりは銅級と銀級が組むと、必然的に依頼の難易度が下がる。銀級の評価がシビア故に、俺が降格する可能性がある。そうになると、庇うのがまた難しくなってしまう。とはいえ、特例を認めすぎる訳にもいかない、ということか。」

パーティーのアンバランス。アイシャは頷きながら話す。

「まあ、そういうことになる。信賞必罰故にバランスが難しいところだ。ネロと組み続けるというのは既に決めていることだと思っただ。現状、かなり危ういところだと言える。」

「それ故にこれからの方針決定を考えてくれ、ということだな。なら大丈夫だ。ネロを鍛える予定を今組んでいるからな。恐らく俺の見込み通りならネロは8年で俺と同等、もしかすればそれ以上に強くなれると思っている。それについての心配は必要ない。青銅と鉄なら超えることは難しくもないだろう。」

竜也はきつぱりと言い切る。その様子にアイシャも肩の荷が下りた表情を見せた。が、すぐに真剣に戻ったために竜也ももう一度気を引き締める。

「そうか。既に目算はついていたのだな。よし、それなら最後、これは私情なのだが…

私と結婚してくれないか？頼む。」

：いきなりアイシヤが告白、いや、プロポーズする。その様子は明らかに本気。ふざけている様子は皆無。しかもアイシヤのその姿は男なら夢見る程だろう。どんな男でも断ることなどできない、そう思わせる程の美しさ。

しかし、竜也は即断する。いや、既に心に決めている。

「断る。既に俺は妻がいる。必要ない。現地妻も重婚もいらん。第一に何故に俺なのだ。会ってまだ3日だ。俺を知らないことの方が多いただろう。それにアイシヤならば良い男くらい捕まえられるだろうに。」

竜也の一見もつともそうで、しかし竜也の場合なら言わなくてもわかるだろう質問にアイシヤは答える。

「出会った中で今の私より強い男は竜也、お前だけだ。後知らないことが多いのは確かだが、それでも竜也は良い男には間違いないぞ。懐柔を成功させるには下心が多いものはまず不可能だ。さらに多くは語らぬがそれゆえにはつきりとわかる意思。極み付けには私が今まで出会った男の中で一番男前だ。どんな女も狙うだろう。」

もし私とお前が結ばれ、子を成すなら強い子にも恵まれよう。私のことを他にもある程度は知っているだろう。どうだ？結婚したくはないか？」

アイシヤの蟲惑的で尚且つ魅惑的なその真剣な誘惑に竜也は眉一つ動かさない。

「断る、と言った筈だが？俺は既に一人愛した女がいて、その間に子だっている。それを裏切るくらいならば死ぬ方が圧倒的にマシだ。諦めろ、アイシヤ。」

「本当に本当なのか？これでも私は姿形と才覚は良いと思うのだが：ふふふつ、本命にフラれてしまうとは私もまだまだだ。しかし、諦めろなどは言われても諦めはせんぞ。女を磨き、竜也、お前を確実に籠絡してやろう。楽しみに待っている。」

アイシヤは竜也にフラれても、諦める気は皆無のようだ。むしろ、宣言をしている。

しかし竜也にここまで一筋に愛される女とはどれ程なのか、と興味深く感じたアイシャであった。

第二章 鍛練とお伽噺

竜也はアイシャのプロポーズを振ったその後…

竜也はネロに稽古をつけていた。あの後、アイシャが、今日はどうすると尋ねてきたので、自身の文字の習得とネロの鍛練をすと言っておいた。そしたらアイシャは訓練の様子を見ておきたいと返し、竜也の近くで訓練を眺めている。

その稽古にはネロだけでなく、フェンラルも参加？している。どちらかという、遊んでいるように見えなくてもないが…走り込みや実践訓練をしているのを見て真似をしている。

鍛練する本人であるネロは、木刀を持ったまままで訓練をする。あらゆる状況でも剣を振れるようにするためだ。かくいう竜也も刀を持ったまま様々なことができる。後は構えと型をひたすら練習させる。これは経験を積むしかない。長い目で見た長期訓練とも言える。下手に実戦をやらせる訳にもいかないだろう。魔物相手となると別かもしれないが、それでも下地があるのと無いのと差は大きい。教える合間に竜也は片手に木刀を片手に本を持って、勉強をする。文字を理解できていないままだと、これからにも支障が出かねない。銀級なら尚の事だろう。故に覚えている最中だ。のだが、その様子を見たいアイシャが見て

「本当にそれで覚えるのか？竜也。…少し暗記テストをさせたら9割正解した程に出来ていたが。私が着きつきりで教える機会が無くなるのでは無いか。」

と、驚愕とも呆れともつかないことを言っている。ちゃっかりした欲望も漏れていたが。

因みにギルドの中庭でやっているわけなので、自然と冒険者達に目立つ。ふと見ればフォーナムや他にもちらほらという。よくよく見れば最初に会った冒険者達であるバタフライもいるようだ。

アイシャから聞いたのだが、現在ラズーロの町の最上級は銀級で、俺を含めて9人いるそうだ。そんな実力者の鍛練からは学ぶことが

あると思っただのだろうか。冒険者達は依頼を受けずに鍛練の様子を詳しく見ている。

とはいえ、竜也の訓練は基礎を徹底して詰めているのと変わらな
い。それが如何にどのような状況でも発揮できるかに重きを置いた
訓練故に、熟練者には参考にならないだろう。なら、熟練者達は何を
見ているのか？

竜也の姿である。木刀を手足の様に捌き扱う。構えは本を持ちそ
の内容を覚えているのにも関わらず一切崩れない。体軸が一切揺る
がず隙も一切ない。無意識なのに完全だ。それはどれほど鍛練を積
めば至れるのかすらわからない程の武の境地。

「やはり、格好いいだけじゃなかったわね。あんなレベルは何十年も
積まないとまず無理よ。」

「本当に…恐るべし、ヒノモトね。あそこにいる武士モソノフと呼ばれる人達
はあれが平均レベルなのかしら。」

遠くにいるバタフライから聞き逃せない単語が出てくる。武士モソノフ
があるのか。それだけにあの店主の唐揚げ定食と相まって日本の文化
がある可能性は濃厚だろう。しかし、バタフライはその口振りから詳
しいことは知りえない様子だ。その詳細はやはりまだ保留にするし
かない。

見ればネロは今走り込みを必死にしている。その横をいとも涼し
げにフェンラルが並んで走っている。それだけならネロが体力が無
いように聞こえるが、実際は全然違う。スキルと相まってアスリート
の全力疾走並の速度で持久走をしているのだ。平然とついでくる
フェンラルは流石狼と言うべきだろう。

それにしても、貧弱な身体付きのネロがこれ程の速度で持久走を行
えるのだから、この世界の平均身体能力は相当なものだと言えるだろ
う。故に鍛練も修正が必須になってくる可能性が高い。なにせ、身体
的な差が大きいことから、身体能力に限って言えばもっと効率よく鍛
えることも可能だろうからだ。

「ぜえっ、はあっ、まだまだです！」

と言いながら、ネロは想定を遥かに超えた速度で走っている。こう

なつてくると、自分の力とネロの力を再度確認しておく必要性が高い。勿論ある程度はわかるが、全力を把握しておきたい。

「ネロ。ノルマは出来た。だから少し変更する。次は持久走ではなく、全力疾走を見てみたい。俺もする、本気で走ってみよう。そら、いくぞ。」

本の半分のところにあるページまでの内容を全て覚えて閉じ、ネロに話し掛ける。ネロも頷いて返す。近くに居るアイシヤに本を預けて。

大地を掴み、地を蹴り、推進力を生み出し、本気で風となる。その速度は盗賊達を討伐するときに出した速度を優に上回り、音速を容易く突破し…

コンマ一秒にも満たない刹那でギルドの庭の端まで到達する。余剰速度は無理矢理力で抑えきる。ほんの数秒間遅れてネロも到達した。

その様子にアイシヤは驚いていなかったが、他の冒険者達は少し驚いていた。やはり、肉体強化系統のスキル持ちならばこれ位はできるのだろう。

竜也とネロは元の位置にこの世界の速度の駆け足で戻る。

「ふむ、やはり竜也は素晴らしい。スキルの恩恵を既に十二分に活かしている。この様子ならかつて存在していた勇者にも匹敵する実力に登り詰めることも可能ではないか？」

アイシヤがよくある、お伽噺の様な存在の事を口にした。竜也はそのお伽噺に興味が湧く。

「勇者？そんな存在がいたのか。少しその勇者とやらを教えて欲しい。構わないか？」

アイシヤは豊満な胸を張ってお伽噺を始める。

「ふむ、構わん。むしろどんどん頼るといい。…勇者はかつて魔王と呼ばれる災厄を倒した存在だ。お伽噺と言いたいかもしれないが、厳然たる事実としてどちらも居たらしい。30年以上も前の話でな。武を修め、魔法に精通し、スキルに恵まれた若き天才が魔人を従える王を討伐したのだ、という話なのだが、勇者は魔王を討ち取った後に

魔王が最後にかけて呪いで死んだと言われている。」

お伽噺ならではの都合が良いのか悪いのかわからない展開に竜也は眉をひそめる。

「呪いを最後にかけて死ぬ…？自身を生贄にした呪いか？…しかし、流石に話が出来すぎている気がしないでも無いが…まあ、自身とは何の関係も無いな。」

「伝承に伝わる存在程に強くなれるという期待を込めたただだよ。とはいえ、具体的な事は伝わっておらん。私が産まれてもいなかった時の事柄だったからな。」

都合の良い？展開と知らされない詳細。もし、この話が事実だとするならば。

「具体的な事は伝わっていない…存在自体は確定していると言うのなら、それは明らかに隠蔽でしかないな。確かに英雄豪傑は乱世には必須かもしれないが、終われば邪魔だ。良い治世には必要ないと見られたか、敵と見做されたか…よくある政治的手法ではあるな。」

「かもしれない。とはいえ、結局は関係無いの一言に尽きるな。勇者とは結果を残した者が呼ばれる称号だ。何かしら通ずるものは無いだろう。それでは励んでくれ二人とも。私も竜也の心を落とす為に励もう。」

アイシヤは色気と茶目つ気たつぷりに言っていることに竜也は苦笑いする。

しかし、勇者か。自分とは正反対の存在だな。もし、勇者が仮にいたのなら、ぶつかり合う存在になっていた可能性もあったな。

などと考えながら再びネロの鍛練監修と文字理解の為に本を開いて内容を覚える事を平行して同時に行う竜也であった。

第二章 排除と不穏

港町ラズーロに来て4日目。昨日は鍛練と勉強をしていたが、今日は依頼を受ける。

ネロとフェンラルと共に受けたのは先日訪れた魔物の森モンスターフォレストでの依頼だ。フェンラルがいるからこそ2人と1匹での依頼となったのだが…

今回の依頼内容はダンジョンの付近に蔓延している魔物達の駆除だ。猪の繁殖期で餌が豊富だったからかなりの数がいるようで、冒険者達も簡単に近づくわけにもいかないらしい。しかも周りは元々魔物がいる土地、魔物に挟まれれば危険だから、相当難易度は高い。普通ならば。

しかし、以前猪を持ち帰ることができたことからわかるように、フェンラルはこの森の生態系の頂点だ。他の魔物がわざわざ縄張りを犯してなお相手するにはリスクしかないだろう。故に魔物による後ろバックからの急襲アタックを気にしないで済む。

後人数が少ないのは例えフェンラルがいたとしても流石に多人数だと、縄張りが犯されたと認識して他の魔物が出張ってくる可能性がある。それが少数である最大の理由だ。

しかし竜也とフェンラルは当然とするなら何故ネロなのか？というのにも理由がある。

等級においてだがネロはまだ銅級だ。駆け出しに近い。しかし、実力なら既に青銅級ならばあるだろうし、何より竜也が銀級であることに釣り合わせる為に本当に実力相応以上の依頼を受けさせなければならぬからだ。対応策としても事前にしっかりと知識を詰め込ませる。

今回の依頼は危険でもありながら、竜也のパーティーにとっては間違いないおあつらえ向きであると断言できる内容だった。本来この危険度なら最低青銅級以上でないと受けるのすら無理だろう。しかし成功すれば相当冒険者としての信頼とポイントが得られ、ネロの昇級と竜也の等級維持と言う二つの目標の同時達成にぐっと近付ける

から、やらない訳もないのである。

モンスターフォレスト
魔物の森内を進んでいる最中何も遭遇しなかった。フェンラルにある程度殺気を出せという命令をしたために、辺りに重圧が滲み出る。竜也も少し驚く程のものであるそれに、実力の無い魔物が寄ってくる筈も理由も無いからだ。遭遇しなかったのは偶然ではなく必然である。

そして、難なくダンジョンの入り口の前にやって来た。見れば、フェンラルの殺気にあてられているのか、魔物達は完全に戦闘体制に入っている。が、明らかに怯えている。

しかし、狩って頭数を減らさねば被害も出るだろう。つまるところ魔物とは言えど生物の一種。適正な数に戻す必要性は高い。何より人に怪我をさせ、殺すかもわからない。故に依頼も来たのだから。すまないな。

その一言と共に竜也は刀を抜き放ち魔物達の群れに瞬時に肉薄する。ネロもフェンラルも別の群れに突進していく。

狩りが始まった。魔物達も黙ってやられるなんてことはしない。植物系の魔物は蔓や葉や根を、昆虫系は毒針や顎や羽を、獣系は牙や爪を竜也、ネロ、フェンラルに向けてくる。

しかし、遅く、鈍い。確かに急所を狙いにはくる。正確だ。少なくとも野生とは甘い環境等ではない。そんな中で培った力に無駄があるはずもないし、戦術的なことを考えられる魔物もいただろう。だがしかし。

竜也とフェンラルはその程度では遅れをとらない。いや、とれない。それ以上に苛酷な環境で育ってきたのだ。英才教育では決して身に付かない、最大級の力ではなく最小限の力。効率化。そして研ぎ澄まされたその五感。ネロもそれに準ずる環境に身を置き、自分の先達を発見し、それに教えを乞うたのだ。

2人と1匹は魔物達の反撃を一切掠らせもせず力の流れに逆らわずに的確に最小限に放たれていくその攻撃は、魔物達を切り落とし、貫き、両断し、崩し、噛み千切り、砕き、切り裂き、命的確に無慈悲にそして一切無駄なく刈り取っていく。ネロは少し覚束無い

ところもあつたが、それでも尚意思を強く持つて、そして魔物達の力を無理矢理調伏してゆく。そして。

狩りは終わりを告げる。後に佇むのは刈り取った3の死神と刈り取られた無数の骸である。

「終わりました。最早狩り、ですか。命つてこうも簡単に消えていくんですね。」

「ああ、だからこそ、大切だと思うものだけしか結局は守れない。守る気にもならない。命は決して重くなど無い。軽いからこそ大切にしなければならぬ。」

「そうですね。」

ネロも思うところがあるのだろう。しかし、必要ならば、こんなこともしなくてはいけない。それが例え悪意が無くとも。家族や友人がいようとも。動物であろうとも。結局は奪わないと生きていけない。当然だ。

故に竜也は剥ぎ取りを開始する。亡くなったものから得られる物があるのなら、奪いきらなければならぬ。そして、強く生きていかなければならない。そのために殺したのだから。

おおよそ40体もの魔物の剥ぎ取りを終える。そして、必要な部分は森に返してやる。森もまた、そんな死体を受け入れて生者の糧とする。そして、全てが生きてゆく。竜也にとつて弱肉強食とはただそれだけの意味を持つものだとは思っていない。強者は食らう分敬意を弱者にも払わねばならない、そう考える。竜也の隙の無い姿勢を生む一端の考えでもある。

ネロも竜也を手伝い同じようにする。そして、役に立つ部位などを全て収集し終えて、ラズーロの町に戻っていく。

ラズーロの町のある暗がりの家でその男達は密談をしていた。あの計画ランドウルフについての打合せだ。

「あの牙狼ランドウルフを持ち主を殺して奪うために、持ち主を調べてきた。：が、あまり詳しくはわからない。刀を持つこと。パーティーに少年がいること。スキルは身体能力強化系統であること。そして銀級に飛

び級で上がったことはわかったがどうする。」

「寝首をかくしか無いだろう。とはいえ、狼が近くにいる。少なくとも臭いや気配を隠滅させるものがあるだろう。」

「それについては大丈夫だ。スキルがある。…いけると思うが万が一を考えて魔法牢だけでなく、睡眠香も使うべきだな。少年がいるなら、人質にとるのもいいが、冒険者だ。油断はするな。何を使うか完全にはわかっていない。持ち主と同じ身体能力強化系統らしいが：要心しておけ。」

「ああ、冒険者ギルドに寝泊まりしているともあった。あまり都合が良いとは言えないが、こちらも期限がある。仕方あるまい。見つからずに隠密に遂行するには麻痺針や毒針も仕込んでおくべきだな。」

会話の内容から察するに闇の依頼を受けた者達だろう。しかも、相当な手練れの。

不穏な空気漂うラズーロの町。

竜也達は帰ってくる。危険も知らずに。アイシヤの懸念通りのことが発生する間近である。彼らの目的は殺害と強奪。果たしてどうなるかは事の後にのみ知ることになるだろう。

第二章 暗殺と罠

夜の町。影。暗闇。月明かり。草木も眠る丑三つ時。闇夜に紛れて蠢く者達。ある闇の依頼を受けてそれを成さんとする暗殺者達が行動を起こし始めた。狙いは牙狼^{ランドウルフ}。竜也と呼ばれる得体の知れぬ冒険者暗殺も含めて。

暗殺者達はまず睡眠香を風上からギルドに流し込む。ある程度流し込んだ後に睡眠香を消して懐にしまいこみ、3人が別々の入り口から互いに役割を持って行動を始める。

寝静まった冒険者ギルド。眠らされた者達もいる。そんな中を音一つ立てず滑るように奇妙に進んでいく。そして、竜也という冒険者のいるところに難なく辿り着いた。牙狼もネロという少年もいる。睡眠香が効いたのかそれともただ単に眠っているだけなのか。

しかし、それは依頼遂行になんら関係は無い。

音も悲鳴もなく竜也を殺さんとして伸びていく影。暗殺に使う毒が塗り込まれたナイフ。それは容易く、そして楽に人を殺すだろう。その刀身は竜也の首の頸動脈に刺さり、そして夥しい出血とは裏腹に静かに死んでしまった。

————はずだった。

気づけば手元にあったナイフの持ち手が全て切断され、刀身は床に刺さっていた。そして、暗殺者達は一人を残して胴風ぎに一刀両断されていた。

馬鹿な、有り得ない、何故だ。

それが、その感覚が、その感情が、その恐怖が真つ先に心に浮かぶ。少なくとも睡眠香に当てられて眠っていた筈だ。そうでなくとも、自分達も手練れだ。寝ているか起きているかの判別はわかる筈であったし、なにより竜也の殺気に気付けぬ筈がない。

しかし、現実には仲間二人が既に討たれ、そして生き残った自分は暗殺者の矜持として悲鳴こそ上げていないが、利き腕と右足を叩き折られていた。

速すぎる。いくらなんでも、見えないなんてレベルではない。理解

すら追い付かない。だが、ここで捕まる訳にもいくまい。

すぐさまそう思い直した男は奥歯に仕込んでおいた毒を噛み千切り、絶命しようとする。

しかし、それすらも読まれていた。

竜也という得体の知れぬ冒険者はすぐさま自分の口に手を突っこみ、その毒を抜き取ったのだ。そして自害をしないように口に布を詰め込まれ押さえ込まれる。

訳がわからない。何故こうも慣れているのか。

この竜也という冒険者は間違はなく暗殺され慣れている。そこから何度も身を守っていなければ成せない無力化と完全な行動不能。自害をするとわかっていなければまず毒の存在にすら気付けない。そして、そこまでするのは上級の暗殺者のみだ。捕まったときの事を考えて動くのはそこまででもできるが、死ぬのはそれほどでないからだ。そしてこの手際の良さ。

こいつは、荷が勝ちすぎたか…

そう思いながら眼の前の冒険者を見る男だった。

魔物の森の依頼をこなし、港町ラズー口に戻ってきた竜也達だったが、不意に竜也とフェンラルは何か得体の知れない気配を感じた。

フェンラルは主というか相棒の危機の予感を野生の勘で反応したに過ぎなかったが、竜也自身は完全に察知した。元の世界でもよく差し向けられた、あの忌ま忌ましい気配。つまりは殺し屋。

フェンラルを狙って闇の依頼を出した奴が居たか…面倒だが間違はなく凄腕だ。何度も感じた奴等の気配の中でも相当に上手く紛れ込んで気配を隠している…

急に竜也の顔が険しくなったのを見て、ネロがそれを不安がる。

「竜也さん。何かあったんですか？何か…顔が険しくなっていますよ？」

「気を付けてくれネロ。フェンラルもだが。暗殺者が町にいる。間違はなく俺ら狙いの凄腕だ。万が一を考えてくれ。」

「えっ…」

竜也はネロに打ち明け警戒を促す。ネロは驚き、少しだけ怒ったような顔をしていたが、すぐに引つ込めていた。

冒険者ギルドに戻り依頼遂行を報告し、その後アイシャに取り次ぐように頼んだ。

アイシャはすぐに出てきて、そして竜也の顔を見るなりすぐさま察して相談室に竜也達を連れ込んだ。

「ふむ…暗殺者、か。やはりか…どうする、竜也よ。その顔を見る限りでは少なくとも凄腕だろうに。」

「迎え撃つしかないな。いつくるか、なら恐らく今日だ。予め情報は仕入れておき、そしてすぐさま決行するのが大抵の凄腕達だ。気配を感じたなら間違いなく夜間襲撃と見て間違いないだろう。」

「あいわかった。油断はするなよ。」

アイシャも現場に駆け込んできた。横の部屋で待機しており、竜也が暗殺者達を切り飛ばしたのと全く同時に入ってきた。フェンラルも既に起き上がって臨戦態勢に入っていた。ネロさえも刀に手を掛けている。

もし、ナイフが竜也に刺さったら…

なんてのは元々から有り得ないことだった。この状況では暗殺者達は火に飛んで入る虫と同じくらいのものだ。さて。

「アイシャ、尋問は可能か。」

「ああ、可能だ。そういう魔法があるものでな。だからこそ、今回の暗殺者達は恐らくだが、自決しかねんな。それを阻止できるか？」

「可能だ。やってみせよう。」

予め情報は打合せてあった。睡眠香を使いかねない、ということ、アイシャと竜也達と残る職員達は睡眠無効の魔法をかけておいたのだ。睡眠が効かなかったのはそれが理由だ。後は寝てるフリを磨くだけ。そして、万全で臨む。

今回ギルドに残った職員は皆が手練れだ。それぐらいに手ぐすね引いて待ち構えていたのだ。万が一を考えて竜也の部屋も最奥にして逃げにくくすらししておいた。暗殺者達を嵌めたのである。

アイシヤが情報を引き出してみると、どうやら研究者では無く貴族が仕掛けたようだった。よく考えれば腑に落ちるだろう。少なくとも一介の研究者如きがここまでの暗殺者達と知り合える訳も無い。竜也を消した後なら、どうとでも言い分は立ったのだろう。冒険者から牙狼ランドウルフを引き取ったのだ、とも。

しかし、そちら側の思い通りなどにはならなかったし、第一に尻尾を掴んだ。なら、やってやる仕返しは唯一つ。法的に則った厳罰だ。

竜也は暗殺者からわかったワース侯爵という不屈き者に向けて殺意と怒気と闘志を漲らせていた。

第二章 謀略と襲撃

ワース侯爵という不屈き者に暗殺者を差し向けられた竜也達。これからどうするか。決まっている。完全なまでの報復だ。やられてそのままにいる程竜也は穏便でも無い。しかし、そのまま突っ込んでいって首を叩き切る程馬鹿でもない。

証拠が一つ程度では足りないな。言い逃れもしくは知らぬ存ぜぬで押し通す可能性が非常に高い。もしくは名を騙る偽物の犯行だと言われかねない。なら、完全に叩き潰すには逃げも隠れもできぬ程に証拠を集めてやればいい。知られぬようにな。

竜也は物理も得意だが、元々竜虎組組長だ。搦め手も知っている。知り尽くしている。なら、こういう場合は…

「アイシヤ、少し頼みたい。今から俺は少し顔を隠して生活する。そして、一時的にフェンラルの管理権を渡しておきたい。勿論渡すわけではないが、ワースとかいう屑を叩き潰すのに必要だ。なにより、冒険者ギルドがこのまま手を出されたままなどでは終わるに終われないだろう。囿になってはくれないか？」

不躰で危険な頼みだ。つまりは証拠を押さえるために竜也を暗殺者に殺されたように見せかける。しかし、既に所有権はアイシヤに移っており、フェンラルは手に入れられない、とするのだ。

こうしてもワースは恐らく諦めない、いや、諦めきれないだろう。なにせ、フェンラルを手に入れられないばかりか、事情を知っている者に所有権が移るのだ。卑怯者ならば消すか拉致するか、ないしは…

接触も有り得るだろうが、少なくともそれは冒険者ギルドに真つ向から喧嘩を売るのが等しい。そうなれば、冒険者ギルドが王国に協力しない可能性もある。なにせ、既に接触するなど脅しているのだ。それに手を出して弾劾されるくらいなら…

拉致もかなり危険度が高い。故にほぼ確実に暗殺者か傭兵崩れを送ってくるだろう。暗殺には成功したが、肝心の手に入れない何かが起こったために次に向けられるのは恐らく傭兵崩れだろ

う。何が来るかわからない。故にアイシャが了承してくれるかはわからない。立場もある。

「わかった、受けよう。手練れを向けられるのは自分としても手加減無しで戦える。それに関しては望むべくも無い。なにより、散々ワースの奴は冒険者ギルドにちよつかいを掛けてきていたからな。堪忍袋の緒が既に切れていたところだ。」

そんな竜也の考えに相反するかのようにアイシャはすんなりと了承した。アイシャは戦闘狂バトルジャンキーだというのも大きいのだろうが、なにより、ワースの奴が今まで何度も我を通そうと外道法を散々用いていたらしい。

「奴がした妨害のせいで被害は途轍もないことになっている。本部もやっと動けなかった腰を上げることができる。今まで散々煮え湯を飲まされていたのだからな。本部も乗り気だろう。応援すら見込めるな。」

…どうやら恨み辛みが骨髓に染みる程に苦渋を舐めさせられていたらしい。それなら、遠慮も何もなく叩き潰すのも構わないだろう。搦め手を使っても、全然大丈夫だ。

「よし、偽の情報を流してくれ。竜也は死亡、フェンラルはアイシャに譲渡。俺はフードでも被ろう。アイシャの護衛をする。ネロもフェンラルもそうしてくれ。」

竜也が死んだとギルドに偽の報告がなされて数日後、突然港町ラズーロに貴族が訪問してきた。考えてはいたがまさかだった。憎つくきワース侯爵その者が乗り込んで来たのである。

ワース侯爵は冒険者ギルドに入ってきてアイシャを呼びつける。護衛者も引き連れてくる。それに応じてアイシャもフードを被り顔のある程度は隠し、アイシャの護衛役とした竜也と共に相談室へと案内し、話が始まった。

「我輩はアルヴェーダ王国の侯爵家の当主が一人、マストルーユ・ワースである。我輩がここに来た理由とやらがわからぬ程愚かでは無いだろう。ランドウルフ牙狼とやらを引き渡せ。あれは我輩に必要なだ。お前らに

あれは相応しくない。あるべきところに移すが良い。」

高圧で傲慢だ。しかも貴族というのを鼻に掛けた話し方である。他者を見下した物言い。そんな程度の奴にフェンラルを渡す訳にもいくまい。

「断つたはずです。牙狼ランドウルフは冒険者ギルドの管理下に置かれました。それに異を唱えるおつもりで？それは冒険者ギルドへの敵対行為とみなしますが。」

「知らぬな。そんな事に関係は無い。敵対行為でも無い。渡して当然なのだ。牙狼ランドウルフを研究すれば、安全にもつながるだろうし、我輩を守らせるにも一役買うだろう。それを渡した方が益が出る。そんなこともわからぬ程愚かなのか？」

対価も何も無い。挙げ句には他者の事など鑑みない。表面も内面も自己中心的。貴族が腐っている、というのはどこの世界でも当たり前なのかと竜也は内心で呆れ返る。

「なら、お話はここまでです。これはギルドの方針です。なにより対価が皆無。ふざけるのも程々にしてください。では、お帰りください。」

アイシヤが無機質に言い放つ。しかし、ワース侯爵はその顔にいやらしい笑みを浮かべながら立ち上がる。人を蔑み、舐めた目つきだ。フェンラルをどっちにせよ手に入れられると確信しているからだろう。そして、護衛と共に出ていく。その際に竜也とすれ違う。その時にワースは耳元に呟いていく。

「ふむ、あんな女の元にいるのも勿体無いだろう。どうかね？君。あの女がもし死んだらこちらに来る気は無いかね？腕も立ちそうだし、なによりその顔は美しい。可愛がつてあげよう。」

下卑た笑みを浮かべながらワース侯爵は立ち去っていく。護衛に關しては竜也に気の毒そうな顔を向けて立ち去っていく。アイシヤもそれを一応見送った後に相談室に竜也と共にもう一度入る。

「あの男は確かに屑だな。だが、それだけでも無い。ただ単に傲慢なだけではないな。完全に自分の思い通りにはいかなくとも表情も怒りで崩さず、言質も取らせないととは相当な魑魅魍魎だな。」

「ああ、そうだ。あいつは何よりそういう悪事に関しては頭一つ抜けていてな。だからこそ、今まで尾すら掴めなかった。恐らく今回も来るだろうな。気を付けてくれ。後、あの時何を耳元で言われた？」

アイシャにワースから言われた身の毛もよだつ誘いの事を一応話す。その内容にアイシャは苛立つ。

「私が相手にされていけないのに、あの男は竜也をも手に入れようとしているのか?!? 全くもって忌ま忌ましい奴だ! 絶対地獄を見せてやるう!」

憤慨し、怒気を放ち、倒すべき理由が更にできた様子のアイシャを見て竜也は思わず苦笑する。

絶世の美女であるアイシャと貴族の男というだけの傲慢なワースとは男である竜也からして比べるべくも無いのだが…

そんな下らない比較に苦笑しつつも、それでもワースを一切許してやるつもりなどない。ほぼ確実にあるであろう後日の襲撃に備えネロとフェンラルに鍛練を各自で積ませその日を竜也は待つ。竜也自身ワース侯爵のスパイをしながら。

後日、ワース侯爵は自分の領地であるマストルーユで傭兵に接触し、暗殺依頼らしきものを出したのを見届け、ラズーロの冒険者ギルドに戻る。そして、冒険者ギルド本部に情報を予め通達しておいた。

竜也は情報は信憑性が無ければ只の嘘になり、意味を成さないが、予め通達された情報がもし本当なら、間違いなく信憑性が高いために信用されると知っていたからこそ予め通達するという方法へと出た。

実はこれを用いて政敵の地位を仕組んで落とすなどが結構頻繁に起こる訳なのだが、冒険者ギルドという肩書きと、実際に暗殺者から情報はある程度裏付けされていたために、もし、襲撃者が実際に来た上に捕らえられたのならば、間違いなくワースは貴族社会的にも人としても終わる。

万全の状態だが、それを悟られないように上手くアイシャは体調不良すら演じて襲撃者達を待ち構えた。

そして、竜也が冒険者ギルドに報告したその通りに襲撃者達は夜間

に冒険者ギルドに襲撃を仕掛けたのだった。

第二章 暗愚と勝鬨

打ち合い、殴り合い、衝突し合い、殺し合う。ラズー口の冒険者ギルドと冒険者ギルド本部から送られてきた精鋭戦力と襲撃者達は戦闘していた。

「ちっ、全部情報が漏れていたか。しかし、退くわけにもいかんな。」
「だらあ！散々やってくれたお返しだ！受け取りやがれ！」

「流石にここまでとは。ワースの奴もここまで大層な戦力を持っているとはな。ぬんっ！」

怒声。罵声。雄叫び。咆哮。金属音。破壊。

ありとあらゆる喧騒と血と肉の切り裂き音が聞こえてくる。殺し合い。純然たる戦闘。

竜也はそんな中ネロやフェンラル、アイシヤと冒険者ギルド本部の精鋭達やラズー口の冒険者と共闘していた。

送られてきた精鋭達は冒険者ギルドの銀級が20人。そして、対人戦闘に使える道具や武器をかなり運んできていた。火薬に剣に大盾に。

それに加えてラズー口の鉄く銀級の冒険者合計34名の竜也達を含めると計57名と8頭の相棒達が襲撃者達を迎え撃った。

対する襲撃者達は89名。傭兵崩れに盗賊紛いがかかりの数を占めていたが、対人戦闘に向いた本職も34名いたわけである。

正直に言えば最早この規模は小さな戦争とも言えた。

数では襲撃者達が、質では迎撃者達が上回っている。しかし、戦争はやはり数である。

竜也の元の世界でも戦争は数だよ、兄貴！などという名言があるくらいなのだから、どちらが不利かは言うまでもない。

しかし、地理と情報では迎撃者達が勝る。

拮抗、持久戦。そうなるのは自明の理とも言えた。

元来そうならないのがそうなったわけは単純明快だ。町、ではなく冒険者ギルドを襲撃者達が襲ったからである。

普通襲撃を知り、数を知るなら罨や内部分裂を仕掛けることも可能

だ。いや、むしろしない方がおかしいのである。しかし。

今までワースがしてきたことを鑑みてできなかった。もし、嵌める手筋通りにやらねば、どうとでも言い訳が通ってしまう。下手をすれば証拠そのものとなる襲撃者達がないという可能性も有り得た。故に罫も仕掛けず、只の情報隠蔽だけしかしなかった、いやできなかったのである。

何より送られてきた冒険者達は全てワースに煮え湯を飲まされていた。ある者は不当に利益を奪われ、ある者は仲間を殺され、ある者は愛人を、夫や妻を犯されたのである。ワースを引つ捕らえてやれるのならなんでもしてやる、できるならば奪われたものを取り返してやる、という復讐者の集まりでもあった。

対する襲撃者達は金や略奪目的で集められた者と襲撃する本人達であった。これはワースがよくやる常套手段。

つまるところ、襲つたのは山賊などのならず者達であって、自分が関与するところの者達ではない、という手段。しかも、襲撃者本人達が山賊達に接触するように命令していたために、山賊に紛れたその雇われた傭兵崩れを捕まえなければ立証することすら不可能であった。しかも、装備も点でばらばら。山賊にも似た装備をし、万が一には自決という死人に口なしと言わんばかりの方法をとっている。

だが。

竜也にはその存在が見抜ける。何せ、顔を、装備を、何より身体の癖を完全に覚えていた。そして、竜也自身が途轍もない実力者。襲撃者達を殺さずに捕らえるなど難しいことでもない。第一竜也は対人戦闘の技術を磨いていたのだ。そこまでの人数しか殺したり相手取ったことが無い相手だから別に強い訳でもなんでも無い。ただ冒険者達よりも対人戦闘の経験が豊富なだけだ。

峰打ち、首絞め、発勁。あらゆる半殺しの無力化をしていく。殺気も出さずに不可視の一撃を。眉間にこめかみに鳩尾に心臓に肝臓に腎臓に股間に喉仏に喉に。

数十名の証拠人を無力化・自害不可にして、襲撃者としては最後に残った一人に合い向かう。

残る襲撃者は一人。山賊達は今も確かに冒険者達と応戦している。その中で目の前にいる存在は少々別のようだ。

相手の中で一番の手練れ。本部から来た冒険者2名をハルバードで切り裂いてこちらに目を向ける。間違いなく相手方の首魁に当たる存在。

「お前も生かしておく訳にはいくまい。死ね。」

ハルバードをこちらに構えて敵首魁は突進してくる。人槍一体。まるで豹の如く身体に槍を添えて突進してくる。

竜也はわざとその槍を掠らせる。無理矢理避けて尚それが精一杯なのだ、と勘違いさせて踏み込ませるために。

血飛沫が僅かに飛ぶ。脇腹をほんの僅かに切り裂いて。そして、逃しなどしない。ここで死ね。と言わんばかりの、実際に言っていたのだが、その槍を身体ごと方向転換し、竜也に全身をバネの如く引き伸ばして右手で突き込んだ。

それを容易く、そして完璧に槍の柄を竜也は掴む。二撃目の予測など簡単だ。わざと誘い込んだそれに敵首魁は見事に釣られた。

身体を切らせ、身体が超え、回転し繰り出す瞬間に合わせて右足の踵を軸に高速で身体を回し、その回転に乗じて槍の柄を受け捌く。

剣道でのすり足からの方向転換に使うアレだ。正確には少し違う。踵を軸にはしない。この足さばきは実戦用に変えられた、方向転換のみに用いた技術だ。

そして、柄を強力に時計回りに回転させる。親指が回転にはね除けられ、そして、敵首魁は槍を思わず手離してしまう。その回転に槍を乗せ、身体も回し、槍を掴みながらもその勢いを全く殺さずに、柄を敵首魁の鳩尾に綺麗に叩き込む。

綺麗に決まったそれは敵首魁の意識を一撃で刈り取った。

ネロは苦戦していた。何せ、相手にしていたのが山賊の3人組。スリーマンセル何より難しいのがコンビネーションアタックとも言わべき連携。

フェンラルもアイシャも竜也もその他冒険者達も全員手が離せない状況下だった。

アイシヤはというと、

「女だああああ！ひやはあ！犯してやるぜええ！」

などと言う下劣極まりなく、下品で下卑た山賊達をその大剣で切り殺している。が、かなり数が多い。

山賊達が美女を犯そうと群がっているのに近い状態で、冒険者達はかなり一方的に攻撃しているのだが、いかんせん襲撃者達が手練れであつたためにかなり負傷・死亡者が出ていたのだ。竜也達がいなければ、どのみち難しい状態には代わりなかつた。拮抗しているのが精一杯。手を回していられる余裕が無い。

刀を振るう。未だに武を叩き込まれている最中故に山賊達を簡単に仕留めきることがまだ叶わない。それ故に3人組スリーマンセルに翻弄される。肩に腹に太股に腕に顔に僅かにだがかなりの数の切傷が出来ていた。普通なら怯みかねない怪我。

しかし、ネロは諦めてなどいなかつた。むしろ、強くなるために、ただそれだけに。

ネロは意思を更に強く持つた。

それが切つ掛けとなつたのかはわからない。山賊達もそれぞれが切られてネロより深い傷を負っていた。

ネロは踏み込む。恐れなどを乗り越えて。何より自分自身を。

一閃。二撃。三突き。四斬。五手。次から次に殴り、蹴り、突き、斬り、薙ぎ、吼える。

自分は強いのだ。これよりも更に強くなれるのだ、と。

山賊達は深手の上で死なないためにそれを受ける。

掴み合い、斬り合い、押し込み合い、蹴り合い、せめぎ合う。互角。ならばなにが勝利を決めるのか。

意思だ。

ネロも斬られ殴られ蹴られ突かれて血を流し、肉を切る。だが、それでも尚。

山賊達を斬り伏せた。自分は強い、これよりも尚、更に上なのだ、と言わんばかりに。

3人組スリーマンセルの山賊達を倒して、勝鬨をあげるかの如く右手と刀を上げる

ネロ。そして。
意識を手離れたネロであった。

第二章 後始末と深慮

襲撃者達は壊滅させた。ある程度の首謀者達は生け捕りに、それ以外は逃さず殲滅して。

形勢が決まった後、盗賊達は悲鳴をあげて逃げようとした。

「ひっ、ひいいい！」

「なんなんだあのアマと野郎！強すぎる！」

「くそくそ！いつか、いつつ…」

それを竜也が逃す程甘くなど無い。それを瞬間的に把握し、刹那。かの時の盗賊達と同じ惨殺。全滅の憂き目に合わせたのだ。

脚で大地を掴み、そして押し出す。それにより生まれた速度は音速を遥かに越えて。すれ違い、斬り落とす。一刀の元に。たった一瞬で10を越える命が無くなった。閃光もかくや。

戦闘は、いや、小さな戦争は終わりを告げる。

鬼、いや、羅刹による惨殺と塵殺によって。

冒険者達も少なからず損害を受けた。死者が13名。応援が8人、ラズーロは5人。相棒の魔獣も一頭が逝き、負傷した者が大半であった。ネロもあらゆる部位に浅いとはいえ刀傷を負っていた。無傷なのはアイシャのみ。アイシャは感情を隠しながらも少々不満気ではあった。強い相手と渡り合う機会が一切無かったからだ。

竜也はその身一つで拿捕14名、討伐19名、計33名という戦力の三分の一もの数を削る大手柄を腹部への槍の掠り傷一つで成し遂げていた。

これはアイシャが討伐17名という数を遥かに越えていたのも相まって、どれだけ竜也が恐ろしい存在であるかは誰もがハッキリと理解していた。

ネロは討伐5名。勿論筆頭の手柄であることには間違いなく、ネロも実力を認められつつあった。

戦闘の後、怪我の手当て、道具の回収、死者の火葬などの様々な後処理が行われた。

侯爵領マストルーユに官憲達が雪崩れ込む。ワース侯爵の罪が完全に立証されたことにより冒険者ギルドが立告。ワース侯爵の身柄を拘束するためだ。

「ワース侯爵！貴殿にはかねてより冒険者ギルドへの不当介入と妨害行為！そして山賊達を先導した国家への反逆罪と犯罪者を匿った共謀罪に殺人容疑！そして不当な奪取による扶助暴行に誘拐に強盗による様々な大罪により身柄を拘束する！大人しくせよ！逆賊が！」

罪状を述べ、ワース侯爵を拘束しようとする官憲達。しかし、まさか立証される筈が無いと高を括っていたワース侯爵は往生際悪く喚く。

「なに!?そんなことをしたという証拠があるというのかね!?名誉毀損で訴えてやる！下民風情が！」

しかし、そんな往生際の悪い喚きは既に通じもしない。

「証拠ならある！目撃証言の犯行に魔法尋問で吐かせた内容が完全に一致した！その他にも冒険者ギルドから送られてきた証拠品が山のようにある！舐めるなよ！」

「な、なんだと!?それは我輩を貶めるための罠だ！そうだ！そうに違いない！ええい、離せ！下民如きが触るな！」

「抵抗しても無駄だ！連れていけ！罪を償ってもらおうぞ！」

ワース侯爵は離せ下民がと暴れるが、そんな程度で官憲が引き離す訳も無く、すぐさま確保し拘束。手に縄をかけて無理矢理引っ張っていった。

そして。残った官憲達はすぐさまワース侯爵の館や領地を風潰しに探索して回る。すると。

出るわ出るわ。無理矢理奴隷にされてしまった男に女。雇っていた影の者達との契約書。それに引き取られたはずにも関わらず真つ当な扱いを全く受けていなかった魔獣に、極めつけには奴隷を鬻り殺しにしてそれを見せていた十字架に、麻薬や毒薬の栽培所に、殺された貴族達の宝石や爵位を示す紋章に、果ては公爵暗殺計画書の血判までもが。

汚職に暗殺、強姦に殺害。麻薬に強盗。窃盗や脅迫までもが。あら

ゆる罪という罪を立証する証拠品のそれらが山のように出てきたのだ。

官憲達はすぐさまそれらを解放したり元に戻したり王に報告したりと奔走することとなった。

そして、その場に居合わせた官憲達は全て唇を噛みしめて歯ぎしりすることにもなった。

こんな唇をいの今まで誅殺できずにいたのか。
と。

竜也達も奔走することとなった。何故なら竜也が死んだということになっていたことは誤認判定だったことにするために。ネロやその他の負傷した冒険者の治療のために。ワース元侯爵の余罪がまだ無いのかしつかりと調べ上げる為に。そして、奴隷にされていた元冒険者達を再び冒険者に戻したり、ないしは治療するために。その中で見込み無く家族も友人も全て殺され絶望した者は竜也が安楽死させてやったりしたために…

アイシャも久しぶりに駆けずり回っていた。あらゆることに精通している彼女は治療に手助けを通常業務と平行してこなしていたからだ。竜也とアイシャの二人は全くと言って良い程疲れも怪我もしていなかった。その為二人がすべき仕事を片付けて回ったのだ。

その際にワース元侯爵が死刑となり、市中引き回しの上に見せつけて斬首する、という最も重度な刑罰で誅殺されたことも知った。

無傷なフェンラルと行動し、ワース元侯爵が関係を結んでいた暗部やならず者達を塵殺して回ったりもした。

そして、彼らの元にハンターや市民達がお礼を言いに来れた。

「竜也様、アイシャ様、本当に、本当にありがとうございます…！目の前であの下衆野郎に妻は犯され息子は殺されてしまった仇を討って頂けた…！なんといいよいか…！」

と、眼前で咽び泣きながら礼を言う商人の男や、

「本当に今回はありがとうな、君達…！あの野郎に奪われた俺の相棒が痩せ細った姿とはいえ、俺の元に戻ってきてくれたんだ…！ありがとう

とう、ありがとう……！」

と、手を握って千切れんばかりに上下に振り回して礼を言うハンターの男に、

「ありがとう、ありがとう……あなた達のお陰で夫は戻ってきたの……！会えないと思つてずっとアイツを憎んで枕を濡らしていたのに……！本当に……！」

と、とても大きな涙の痕が目元に見られる農家の女が笑顔を見せて礼を言う等。

踏み潰したたった一人は途轍もない悪事を働いていた下衆の極みであったことに気づいた竜也。彼らの感謝を聞きながらも、ある事を心で再確認し、再び更に意思を強めていく竜也。

その先にあるのははたして邪か鬼か。それとも魔王か。

それほどの強い感情を目に湛える。その様にアイシヤすら見惚れながらも根源的な恐怖も感じてしまう。恐ろしいまでの何かを決心する竜也。

ネロが起きたのは戦闘の2日後。そして完全に回復したのは18日後。それに合わせて鍛練の質をより高める為に。

竜也は初めてネロと組み手をすることにしたのだった。

第二章 手合わせと限界

竜也とネロは冒険者ギルドの庭の内で相対し向かい合う。
手合わせ

実力を図る上に更に力を付けるため、いわゆるステップアップのために竜也は手合わせに踏み切ったのだ。

普通、武術でも手合わせはある程度基礎を積んで初心者を抜けてから行うのが当然だ。理由が3つある。

一つ目は心を折らないため。

武術は、心・技・体が最重要視される。これを極めることこそが最高の目標と言っても過言ではないからだ。それをいきなり意気消沈させるようなことをしないために、というのが一つ目。

二つ目は変な癖をつけないため。

初心者为例えるなら乾いた布。知識や技術という水をよくも悪くも吸い込みやすいのだ。それを、手合わせで要らぬ癖をつけてしまつては矯正も相まつて強くなるのに余計な時間がかかる、というのが二つ目。

三つ目は目標を大きくさせすぎないため。

武術とは良くも悪くも終わりの見えない道だ。それをいきなり竜也程の存在が手合わせをすれば、目標にしてしまう。そして、全然追いつけないとしり、心を折ってしまうのはよくあることだ。しかも、それだけならまだしも簡単に追い付けると勘違いして無茶をし、良くも行動不能、悪ければ死んでしまうなどということもある、というのが三つ目。

しかし。

竜也は思う。

ネロの吸収力は異常で、そして、先日盗賊達との一対多数という修羅場をぎりぎりとは言えくぐり抜けたのだ。

竜也を目標として公言していることから相まって、二つ目と三つ目は考えなくてもいい、というかなり特殊なケースだ。

何より、ネロがどれだけの怪物フリークスに育つのかを見てみたくなった。

とは思えない程に。

斬撃、体術。

雨のように降りかかる攻撃の数々。それが止む気配すら見えない。手足の一つと同じ程に木刀を馴染ませ、使いこなしている。

しかし、大振りが多いためか竜也には当たる気配どころか疲れすら見えない。

それに比べ徐々にだが、ネロは疲弊してゆく。不意に。

ネロが疲れきり、動作が遅くなる。その瞬間に、竜也は木刀の中心も中心。そんなところに一撃を仕掛けた。防御をしろと言わんばかりに。

ネロはそれをなんとか防いだ。なんとかだ。本当にギリギリ。

だが、諦める気配など欠片も見えずにネロはその身体で立ち向かう。力など残りもしていない。

またもや突進を仕掛けていく。それもあり得ない速度で。

疲れている筈のネロがどんどんと速度を上げてゆく。いや、上がっていく。まるで、吸い込まれるように。

端で観戦していたアイシャは驚き、それを見つめる。なにせ、それは。

ついに竜也をほんの少しとはいえ後ろに押し込んだのだ。あの少年が。疲れきったあの身体で。

竜也はこれを狙っていたのだ。

行動の最適化。これはいつ起こりうるのか？

それは身体中が悲鳴を上げてこれ以上動けないと判断したとき。

この時に、武芸者ならば。

身体を動かすために動きを身体に最適化させていく。無駄な身体を全て動かすために総動員しながらも。

そして、それはいつしか高みを身体に刻み付けていく。

渾然一体。ゾーン。色々と呼称がつく、いわゆる極限状態こそが。

ネロは徐々に今までの獣じみた連撃の角がとれて、理知的かつ流動的な動きへと変わっていく。

流水が如く。

意思貫徹と共に限界まで能力と技を高めていく。絡み合い、そして頂きへと。

そして、嵐の如き連撃を限界を遙かに越えて続けて。

ネロは疲労で地へと伏したのだった――――

結果、竜也の圧勝だった。少しだけ、竜也を後ろに下がらせた、たったそれだけが今のネロの限界だ。

しかし。

只の少年が竜也を後ろに下がらせたのだ。それは、あり得ないことだった。故に。

ネロは満面の笑みで気絶していた。

才能、という言葉は彼のためにある、いや祝福すら受けているとも言える程の傑物。

竜也とアイシヤはその感触に思わず笑みをこぼしてしまうのだった。

第三章 採取と遭難者

魔物の森《モンスターフォレスト》の森の中…

竜也、ネロ、フエンラル、そして狩人であるラスカは薬草である癒し鈴蘭や解毒草である毒抜き牡丹、ポーシヨンの下地にもなるマジックシメジなどの採取を目的に訪れていた。

いわゆる採取依頼である。

これは、実際簡単でもなんでもなく、むしろ高難易度に近い依頼である。

一つ目にまず、目利きができないといけない。

使えない品などを持ってこられても困るし、そもそも知識も経験も無いものが野草等を見分けられるなんていう筈も無い。

二つ目にそもそも採取するものが安全なところに生えているなら依頼する必要もない。安全なら、わざわざ冒険者を使わずとも安い労働力を頼ればいい。しかも、冒険者ギルドは達成率を高めるために割高なので、専門を雇う方が安く済む。

三つ目に良いものはやはりいい場所どこそ育ちやすいからだ。特に薬草なんかは魔物もそれを目的として集まってくる場合すらあるからだ。

これらから鑑みても採取依頼は簡単にいくものではない。そのため最低でも誰か一人が鉄級で、尚且つ狩人ないしは目利きできるものを連れていくのが必須となっている。

そんな中、竜也は銀級の上にフエンラルまでもいる、というのなら鬼に金棒とも言える。魔物の森《モンスターフォレスト》でなら最も安全なパーティーだ。

ネロは銅級だが、明らかに鉄かそれ以上に実力があり、恐らくこの中で一番非力なのは狩人であり、青銅級冒険者でもあるラスカだろう。

因みにラスカの自己紹介は、

「私はラスカ・グレーン。イケメンと美少年と一緒にでもなるべく働きたくないでござる。守ってください。」

：竜也を思いつきり不安にさせたが、知識と経験は豊富なので冒険者ギルドの職員は採取依頼によく同行させていると言っていた。

実際技術は相当に高いことが実践で判明した。人の性格は案外話す言葉とは裏腹なのかもしれない。

魔物は3人を恐れて出てくる訳もなく、ラスカが納品依頼を受けている麻痺火炎茸の採取を手際よく安全にかつ丁寧に終わらせていく。そんな中で、ラスカは隣にある薬草である癒し鈴蘭や治癒蔓なども少し採取していく。

採取依頼は難易度に見合い、実入りがかなりいい依頼だ。

なにせ、完全に上手くいけば、魔物との遭遇も無いため、武具や防具、矢やポーションなどを大きく節約できる。

更に道具があるので、偶然あつた薬草や素材や材料を確保して持つて帰ることができるのも大きい。

そして、相当な量の依頼金が手に入る。前は一人2金貨30銀貨が7人の合計16金貨10銀貨だったが、今回はなんと48金貨を4人で分ける、つまり一人12金貨である。差は歴然だ。

納品数は24本の麻痺火炎茸と36本の癒し鈴蘭。麻癒丸と呼ばれる、麻痺毒と傷を治療する癒しの能力が高い薬を作るために、ということらしい。

既に納品分は確保した。だが、ラスカは更に採取を続ける。

やはりというべきか魔物の森《モンスターフォレスト》の土壌は相当に良く、しかもダンジョンが近くにあり、魔力の影響を受けるからか稀少な薬草もたまに生えているぐらいだ。

「稼ぎ時、稼ぎ時。なるべく楽しんで暮らすのだ。イケメンや美少年に寄生してもよいですな。」

…このまま仕事を続けてくれることを切に願う。なにせ、技術も知識もあるのだ。辞めるとしたら勿体無いが、これは本人次第だろう。

そんな中かなり森の奥まで入り込む。安全な時に稼いでおく、というのがやはり冒険者の本質で、それができなければ生きていけない。どうやら彼女は今なら安全に稀少な薬草等が取れる、と考えた上での行動のようだ。抜け目が無い。

もう少し進むために森の中のほんの少し開けた場所へと出る。

：なんとそこに誰かが横たわっていた。誰だ。わからないが、かなり衰弱している。身体中に出血や歯跡、突進を受けた様子までも見られるが、そこは対したことはない。

問題は水だ。脱水症状を起こしている。しかもかなり重度だ。恐らく中で迷ったのか、それとも何らかの事情があったのか。様子から見ると恐らく後者。何故なら。

耳は尖っており、魔法の強い気配を感じる存在、つまりはエルフの少女であつたからだつた。

正直竜也は嫌な予感がする。元々森に住む種族などと言えども聞こえは良いが、実際は蛮族に近い可能性がある。

しかも、子供だ。家出、で済めば良いが、こういう場合誘拐と勘違いされれば洒落にもならない。

しかし、流石に放置するにも不味かつた。

辺にも一応魔物はある。しかも、こんな状態は餌にも近く、放置すればいずれ死ぬか喰われるか。

助けない理由が無くなっていた。

竜也はまず急いで木陰に入らせる。頭にも膝枕をして支えてやり、気道を確保する。支えてやりながらも、膝枕を上手く使って頭を上げて水を飲ませたりしてやるなど次々処置していく。

膝枕をしたのは硬いのは嫌だろうと竜也が思ったからだ。少女なのだから、別になんてことすら無いが。

服は：最初から緩かつた。しかも、汗も少ない状況と唇の乾き具合から判断して脱水症状だと特定できたのだ。

因みに森で遭難した時水不足に陥る、なんてのはよくあることだ。安静にして一時間。ようやく意識を取り戻して、エルフは眼をあげる。その眼は白い。アルビノのようだ。

「大丈夫か？」

そんな竜也の言葉。イケメンや美少年が覗き込む状態。そして頭から感じる筋肉質ではあるが石よりもずっと遥かにマシ、いやむしろ

ご褒美ともいえる膝の感触。

「はえっ!?はわっ!」

エルフの少女は顔を真っ赤にして急いで起き上がる。頬を朱に染めながらも状況が理解できない、という不安の色が見える。

「えっ!?人間!?えっ!?うそ!?なんで!?えっ!」

「落ち着け。俺は竜也。この少年はネロ。狩人はラスカ。そこにいて見張ってるのがフェンラルだ。お前の名前は?」

「あっあっサタシヤと申します。サタシヤ・エルドームです。助けて頂きありがとうございます。」

そんな丁寧な言葉で反応が帰ってきた。これが竜也達とエルフの初遭遇だった。

第三章 心を通わす者と再手合わせ

エルフ、それは精霊、森の精霊のことを指す名称。魔法などを得意とし、賢者と言われる程の知識を持ち合わせ、耳は長く、そして長寿。その中でも一際特徴的と言えるものが美男美女である、ということ。ハーフですら人を簡単に魅了できる美しさを誇るのだ。

そんなエルフの子供が脱水症状で倒れていた。しかも、怪我を負っていた、ということからも含めて戦闘もしていたのが見てとれる。

その上で生きている、となれば子供ですらエルフは強いということだ。なにより一人だったということ。それなのに生きているという事実。

：目の前のサタシャと名乗るエルフはそんな風に見えなかった。少なくとも脱水症状で倒れていた、ということはそもそも水を持ち込んでいないのか、使い果たしたか。

水の確保は生存の必須項目であり、それを知らないということはそもそも森の経験がなかった、といえるだろう。

「サタシャは水を持っていないな？何故だ？冒険や遠出をする時には水は必須だろう。」

「お水は使いきってしまいました！弱りきっていた動物を手当てしていたら、いつの間にか、その…」

：なんとこのエルフは動物の手当てをしていたようだ。こんなところで。

「なら、その傷は？」

「これは魔物が暴れちゃって。治すのに苦労しました。てへへ。」

何がてへへ。なのか…

それにしても間違いなくこの子は強い。まず普通魔物に治療の為に近寄ろうとする者などいない。そして、暴れる魔物を押さえつけて治療してしまえることは、まず魔物以上に実力が無い場合できない。

「それにしても、竜也さん？もあの牙ランドウルフ狼とお友達なんですね。すごいです！フェンラルくんだね。よろしくね！」

：それにしてもこのエルフは警戒心がないのかなんなのか。今ま

で警戒したことがあるのかすらわからない。竜也は頭痛を感じた。
と、そこに。

ガサガサガサ。

何か生きものが出てきた。サタシヤとフェンラル以外は全員警戒
体勢で構える。

た

魔物だ。しかも、5〜6頭。こちらを警戒している。

だが、彼らはどうやら敵ではないようだ。

何故ならどこからか汲んできた水をサタシヤに差し出している。

「ありがとう！もしかしてお礼？わっ、くすぐったっ、ありがとうね！」

魔物達に舐められたりしつつ魔物達の頭部を撫でながらサタシヤ
は笑っている。魔物達もサタシヤに助けしてくれた礼を言っているよ
うだ。

モンスターテイマー
魔物使い

エルフでありながら、いやだからこそ魔物と意志疎通を図り、そし
て共に暮らしていけるのかもしれない。

「魔物と意志疎通。養ってもらえるなんて羨ましい。」

「成程。エルフってすごいんですね。」

サタシヤに対して三者三様に思うところがある。が、もういいだろ
うな。

これを見ている限り、助けなくても助かっていただろう。実力もあ
るだろうし。

「もういいか。ではな、サタシヤ。今度は水不足に気を付けろよ。」

そう言っつて竜也達は去ろうとしたところ。

「待ってください！お礼をさせてください！」

サタシヤは引き止めた。

お礼なんてのは一切期待もしていなかったのだが。

「私は役に立ちます！連れていってください！後悔はさせません！む
しろ、ポーシオンなどお返しできると思います！」

「いや、いい。お礼されるようなことはしていない。」

「いえ！自分を助けて頂きました！お礼させていただきます！断られても！」

真面目な上に強情だ。

竜也は頭を抱えるのだった。

依頼を精算しながらもアイシャは苦笑していた。何せ竜也が今度は依頼途中にエルフの子供を助けて、お礼として付きまとわれた、と報告してきたからだ。

エルフ自体は有名で、そこまで珍しくもなく、いつかは竜也と会う者もいるだろう、とは思っていたが、想像を遥かに超えて速かった。

そのエルフの子供はサタシャ・エルドームといい、脱水症状で倒れていたところを助けてもらったお礼をする、と言っていた。が、恐らく本人は気付いていないかもしれないが、その眼は好きな人に向けるそれだった。そういえば、膝枕をした、とも言っていたな。羨ましい。

そういえば、サタシャは何も手立てが無い。ふむ、ならば…

「サタシャ、君はどうやってこの町で生きていく？ここで生きていくには金がいる。森なら生きられるかもしれないが、君はどうする？幸いここは冒険者ギルドだ。これは提案なのだが、竜也のパーティーと組んでみたらどうか？君ならいけるだろう。恩も返せる。竜也はどうか？」

「パーティーに入れる？確かにそれはいいな。だが、あまりにも知らないことが多い。確認してからだ。」

「入ります！入らせてください！」

「なら、手合わせをしようか。」

久しぶりだ。エルフと手合わせするのは。かつての仲間を思い出す。

ギルドの中庭へ鎧に身をやつして共に出る。サタシャは空間から武器を出して構える。

短刀、いわゆるダガーだ。対するこちらは大剣。

「いくぞー！」

地を蹴る。そして、すぐさま間合いを詰めようとする、しかし。
「プラントウィップ植物の鞭！」

魔法がかなりの射程を持っており、それが放たれる。アイシャは体を右に傾け避けた。その威力は地を微かに抉りとる程の力だ。強力無比。

しかし、当たらなければ意味は無い。その鞭の尽くを避けて間合いまで詰めきる。

そこでサタシヤは魔法は無理だと諦めてすぐさまダガーで攻めてくる。相当な速さだ。だが、短刀と大剣ではリーチと威力が大きく違う。短刀のリーチの外から振る大剣の一撃がサタシヤの長い耳の微かに上で止まる。

「まっ、参りました！」

ふむ。間違いない。サタシヤは経験不足がかなり大きい。だが、十分だ。いや、むしろ竜也にとっていいだろう。

「わかった。組もう。これだけやれるのと、フェンラルに害を与えず、そしてネロと共に鍛練ができそうだな。よろしく頼む、サタシヤ。」
「え？ やったー！ 組めるんだ！ よろしくお願います！ 竜也さん！」

サタシヤは組めることに満面の笑みを浮かべている。喜ばしいことかもな。

こうして、竜也のパーティーに新たに一人加わった。果たしてこのエルフは恩を竜也に返せるのか、それは誰にも今はわからない。

第三章 亜種族と再結成

アイシヤとサタシヤが手合わせを終えた後――

竜也達は相談室でエルフについて話していた。

「竜也、ネロ、エルフについて、いや人とは違う種族達について詳しく説明しておく。」

「エルフや異種族についてですか……？」

「説明しなければならぬ程の事とは一体なんだ？…：力のことか？」

「ああ、そうだ。まず、エルフについてだが、彼ら彼女らは魔法に關せずば抜けている。魔法の力だけで言えば、まさしく一騎当千と言える。それが、当たり前前のレベルだ。どれだけ才能が無いエルフでも最上級魔法が使えるレベルだ。」

「すまない、まず魔法について説明してくれないか？生憎俺は使えないからな、知らないんだ。」

「自分もです。よろしくお願いします。」

竜也は魔法が一才使えず、ネロはほんの少ししか使えない為に魔法の情報を持っていない。だから、そのままではついていけないため、アイシヤに聞き返す。

「そうだったのか。まず、魔法についてだが、初級から上級までが一般的だ。上級が使えるなら人間としては才能がある、と言える。そして、属性があり、基本的には火・水・風・氷・土だ。」

勿論だが例外は存在する。上級以上の魔法、つまりは人間では天才が使える最上級、そして、それらを遥かに越えた魔法、通称位階魔法だ。位階魔法は使える者は人間の握り以下…：だが、人がそう呼称している亜種族なら使える者は多い。これは一く五までである。が、第四位階魔法、第五位階魔法は使えた者は存在しない。そして威力は第三位階魔法ですら国一つを消し飛ばせる程だ。

属性も、雷・光・闇など基本以外もたくさんある。混合属性、他にも全ての属性が使える、なんて者もいる。これが魔法の情報だな。」

「どうやら異世界の魔法と言う概念は相当奥が深い。様々な要素があり、その上に魔法があるようだ。」

「魔法がそんなに強いのか？いや、何か欠点もあるのか？」

「ああ、ある。強力な段階になるにつれて詠唱時間も必要魔力も跳ね上がる。魔術師は対人戦では弱いな。その上魔物と戦うにもあまり向いていない。とはいえ、創意工夫次第でどうにでもなるが。」

「成程。：で、亜種族はどうなるんだ？教えてくれ。頼む。」

「ああ、エルフの説明に戻る。第三位階魔法を使った大賢者と呼ばれる存在もエルフの種族だ。エルフは基本的に第一位階魔法までは使える。エルフは魔力に恵まれた種族だ。」

：ここからは亜種族についてだ。基本的に亜種族というのはやはり数が少ない。それでも人間は亜種族に攻撃を仕掛けないのは、亜種族は人間を歯牙にも掛けない程に強いからだ。

私は冒険者として見れば強いかもしれないが、オークとして見れば、若干強い程度だ。皆が、子供ですら一般兵士を圧倒できる強さを持つ。

ゴブリンは例外だが、それでも個人で人間よりも若干強い上に連携では人間ですら遠く及ばない。そして、亜種族達は皆が皆仲間意識が非常に強い。一人拐われれば種族総出で救出と殲滅を行う。更に、亜種族達で連合が組まれており、お互いに把握し、助け合う互助組織に入っている。

極め付きには亜種族は友好的な人間に莫大な利益を齎す。エルフは魔術やポーションや医学や歴史、オークは農業や畜産や料理や美術、ドワーフは工学や鍛冶やエンチャントや錬金術、ゴブリンは戦術や道具や情報や狩り、オーガは鍛練方や修練場や労働力や人体強化方法など、その他様々な利益を人間達に齎しているんだ。それを受け入れない、ということは発展を遅らせる、つまりは自分で自分の首を絞めるということに他ならない。だから、亜種族は確固たる基板があり、手を出さない、出されないといい関係図になっている。」

「つまり、サタシヤに何かあれば不味い。全力で守れ、ということか？」

「違う。心配する必要は無い、ということだ。竜也はそんなことする必要が無いだろう？」

因みにだが人間至上主義を取った国がどうなったかと言えば、ありとあらゆる援助を亜種族から拒否され、無理矢理引き出そうとエルフを拐おうとしたのだが、返り討ちに遭い、そして亜種族連合に攻められて瞬く間に滅んだよ。帝国とも呼べる国がたつた半月でな。それほどだから、亜種族に手を出そうとする馬鹿は基本的にはいない。」

「でも狙われていなかったか？アイシヤ。ワースが知らなかったなんて訳も無いだろう？」

「もし私が死んでいたらそれこそ法など無視してワースは全ての亜種族に攻められ全滅していただろうな。それも含めてあの時は無茶に出たんだ。」

「成程な。安心しろ、ということだな。：サタシヤ、改めてよろしく頼む。因みにどれくらいまでの魔法が使える？出来れば教えて欲しい。」

「第一位階魔法までなら使えます！後16歳です！よろしくお願いします！」

：16？明らかに少女にしか見えない。11歳ぐらいだと想像していたのだからな。

竜也の僅かな驚きを見てアイシヤが付け加える。

「因みに人種が一番寿命が短いとされるな。エルフが最長だ。エルフの成人は20歳。人間が15歳なのに比べて長いと言える。ネロは後2年だな。」

ネロは納得だ。それくらいだと思う顔付きに声。その精神。まあ、強くなりたい気持ちに偽りは見えないが。

「それにしてももう第一位階魔法が使えるのか。将来的に第二位階魔法も使えるかもしれないな。羨ましい才能だ。私は最上級魔法までしか使えない。」

「魔法は得意です！ですが、人と戦うのは苦手で：心を通わせるのも得意ですね！後は医学薬学他にもポーシヨンも！」

サタシヤは真面目に言う。エルフは魔力に恵まれた種族とアイシヤが言っていたが、サタシヤはまさしくその通りのようだ。

「後衛に向いているな。と言うより後衛しかない。後衛なら最高だが

前衛としては並み以下か。まあ、パーティーには前衛しかいなかったし、フェンラルを理解して、共に戦うことができるのだから最適とも言える。…サタシヤの能力を更に見てみたい。明日はまた採取依頼を、明後日は討伐依頼をこなそう。いけるか？アイシヤも依頼選別を頼みたい。」

「はいーいけますー！」

「ああ、任された。力を判別しやすい依頼を出そう。」

サタシヤは真面目に、アイシヤは気前よく答えてくれた。竜也は他にパーティーのメンバーにも問い掛ける。

「ネロもフェンラルも色々サポートしてくれるな？頼むぞ。」

「はい。わかりました。」

ネロは端的に返事を、フェンラルは一声吠えて了解する。そこからあらゆる情報を擦り合わせて相談は終了した。

朝、3人と1匹は採取依頼を受けた。因みにサタシヤはギルドに寝泊まりすることに決めたようで、集合することは簡単だ。

今回の依頼は新たな地である深沼というエリアでの採取依頼だ。目的は月下美人草と呼ばれる鑑賞用の美しい草花を20本収集。因みに新しい土地であるために案内人としてまたフォーナム達と組むことになった。

「よろしくお願いしますっす！竜也さん！ネロ君！フェンラル！そしてエルフのサタシヤさん！いや〜エルフとパーティーを組む日が来るとは思ってたつすね〜。」

「よろしく頼む。竜也殿、ネロ殿、フェンラル、サタシヤ殿。それにしてもエルフとはこれまた凄い…」

「今日もよろしくね！竜也！ネロ！フェンラル！サタシヤさん！…エルフって魔法が凄いのよね！教えて欲しいな！」

「…よろしく。竜也、ネロ、フェンラル、サタシヤ。…エルフの美少女才色兼備。」

「よろしくお願いします。竜也さん。ネロ君。フェンラル。サタシヤさん。」

タロス、ペルーナム、サヘル、トリンドル、ドンモが口々に挨拶してくれた。それにネロとサタシャも挨拶し、フェンラルは僅かに鳴いて挨拶をしているようだ。

数カ月前にトリンドルとドンモの二人だけが青銅級だったが今やサタシャ以外は青銅級以上で竜也は銀級だ。

強化、新加入した面々の気力は充分。フォーナム達の武器や防具はかつて革や木製だったが今や鉄や魔獣素材でできたものなどに変わっており、一層頼もしくなっている。

いつか、ネロやサタシャにも良いものを持たせてやらないとな。

一番防具が薄い竜也は自分の事も考えずにそんなことをふと思うのだった。

第三章 湿地とスライム

深沼、それは沼地に囲まれ、湿林とも言うべき植物と水に恵まれた場所。しかし、水捌けがかなり悪く、水が飽和しておりそこかしこがぬかるんでいる土地。

竜也達とフォーナム達の脱初心者パーティー一向はそんな場所に到着していた。竜也達は初めての、フォーナム達にとっては何度目かの地帯である。

この場所はラズーロを南に2時間程行った先にある。深沼に着いた時は10時くらいだった。

因みに難易度としてはそこまで高くはない。が、モンスターフォレスト魔物の森と違うのはかなり拓けた場所である、ということ。つまり、かなり魔物を発見しやすいし、されやすいということ。

そして、何より危険な魔物としてスライムが確認されている。

スライム、それは体が液体で構成され、体を保つための核を体内に持っている魔物。

それゆえにここでは水を吸って肥大化したのが現れることが多く、危険な魔物として扱われる。

スライムはまさしく大きさが強さに直結している。特にスライムキングと呼ばれる大きさを持つスライムの魔物は滅多に現れこそしないが、その大きさ故に刃物を通っても核に届かない、魔法すらも届かない、なんて事もよくあり、銀級ないしは鉄級パーティー2団のクエストとして扱われるなど、その特殊性と危険性は折紙付きだ。

滅多に現れないと言ったな、あれは嘘だ！

そう言わんばかりに竜也達とフォーナム達の目の前にスライムキングの大きさを持つウォータースライムは現れた。

フォーナム達は戦慄している。大きさもあるが、なにせ、スライムは子供に寝るときの脅しとして使われるそうなのだ。

いい子にして寝ないとスライムが枕元に寄ってきて窒息させちゃうよ！と。

それを聞いた時、竜也達はなんて具体的な脅しなのだろうとかすか

に笑ったぐらいである。特に竜也はよくスライムが

ぷるぷる。僕悪いスライムじゃないよ。

なんていう台詞を言っていたことも思い出してしまったものだが。それは一旦置いておいて。

今の状況としてはかなり不味い状況でもあった。なにせ、スライムキングはフォーナム達では役不足だろう。ここは一旦退くべきなのかもしれない。しかし。

ネロとフェンラルとサタシャは既に戦闘態勢に入っていた。サタシャはどうやら獣の魔物で心を通わせる者は傷を治し、心を通わせる時もあるのだが、基本的には冒険者達のように相手取るようだ。

ネロとフェンラルはフォーナム達よりも果敢に前へと躍り出る。そして、迷わず近接戦闘を仕掛けている。

スライムキングはその巨体を活かしてのしかかったり、体当たりしたりしようとするが、ネロが刀で足下を斬り裂き、フェンラルが牙や爪で体中を削いでゆく。

スライムとは言え体を分断されればそこは元の液体へと変化していく。勿論再吸収することもできるし、スライムキングはそれを試みている。が、それを上回る速度でネロとフェンラルが体中を滅多斬りにし、ズタズタに削いでゆく。

竜也はスライムキングが怯む隙を一切見逃さない。

居合い一閃。

別に居合いは強い訳ではない。だが、相手の懐に潜り込めば潜り込む程に届く範囲が伸びる。

刀は構えてる状態よりも鞘に納めている方がやはり潜り込みやすい。それを相手の性質に合わせて判断した。

スライムキングは生半可な傷ではすぐに体を接收し、完全に元通りへと直してしまう。しかし、コアは相当に深い場所であり、届かない。それを見越しての大切断。体の半分まで切り込みを入れる。そして、そのまま斬り返し、核を切断しようとする。

しかし、それは届かなかった。竜也達は危機を察知して思わず後方へと飛びずさる。竜也は斬り返しは危険だと察知して攻撃を中断し

た。

飛びずさる直前にスライムキングの体が一瞬縮み、飛びずさった直後にスライムキングの周辺に体から超高水圧の水が吹き荒れたのだ。まるで水爆弾。スライムキングの辺り帯はその吹き出た水流が見事に挟り、僅かながらも地形すら変えている。その水流にもし巻き込まれていけば、体が様々に分断され、即死していたかもしれない。それ程に強力な無差別範囲攻撃だ。

最も当たれば、の話ではあるが。

凶悪だろうが関係無い。上回ればいい。竜也達は一切戦意が衰えていないし、集中も緩んでいない。しかも、その攻撃はスライムキングにとって体を使った捨て身に近い攻撃だろう。死にはせずとも体が一回り小さくなっており、スライムキング討伐がより一層簡単になった。

「暴風裂断刃ストームウインドー！」

サタシヤはその弱った瞬間を逃さず、詠唱していた風上級魔法をキングに放った。それは局所的に暴風を起こし、風の刃、すなわちかまいたちを生み出す。それをスライムキングを包み込むようにして放ったのだから、スライムキングは成す術もなく体を分断され、切断され、切り落とされ、そして核を晒し始める。

それをどうにか核を守ろうと水の体を総動員して核を包み込むのだが、暴風に曝され、核を守ろうとする体は減っていく。

そして、暴風の魔法が消える頃にはその体はキングと呼ぶにはあまりにも小さくなり、キングと呼ぶに相応しい大きさを持つ核とそれを僅かになんとか包む水のみが残っていた。

サタシヤはそれに躊躇なく近づいていく。

そして一閃。サタシヤが近づいて短刀で止めをさした。

核を傷つけられて体が保てなくなり、スライムキングは水をその場に吐き出して力尽きた。

「凄いつすねえ、出番なかったつす。はええ…！」

と、僅かながら震えてタロスが、

「アイシヤ殿や竜也殿並みか。ネ口殿もフェンラルもサタシヤ殿も。

恐ろしく、そして頼もしいものだ。」

と、尊敬と畏怖を込めた目でペルーナムが、

「凄…私まだ中級までしか使えないのに…エルフてやっば凄いのね…」

と、呆然としながらもサヘルが、

「…一方的。組んで良かった。」

と、信頼を込めてトリンドルが、

「やはりお強いんですね。本当に憧れますね。竜也さん、ネロ君、フェンラル。そしてサタシャさんも恐ろしくお強い。」

と、敬意を込めてドンモが呟いていた。

それにしてもサタシャは対人戦には不慣れでも対魔物戦なら充分良くやってくれる。いや、状況次第ではこの場の誰よりも切り札たり得る。これは、とんでもないな…

竜也はサタシャのその魔法に思わず舌を巻く。闘ったとしてもサタシャに負ける気は微塵もしていないが、殲滅においては自分すらも遙かに上回る。適材適所。間違いなく仲間としても穴を埋めるに足る人材をこうも偶然に拾えたことに感謝していた。

「どっ、どうでしたか!?お役にたてましたでしょうか!？」

「ああ、充分すぎる程に貢献してくれた。よくやってくれた。サタシャ。ここからも頼むぞ。」

「ありがとうございます。物凄く助かりました。」

「えっ、あっ、はい!ありがとうございます!」

竜也達はスライムキングの戦闘でお互いに認め合ったのだった。

スライムキングを倒したが、これは依頼目的ではない。元々採取依頼なのだ。

「ありました!…ここら一带の薬草はまあまあですね。」

冷静に手際よくサタシャは目的の月下美人草と他に効能がある薬草や解毒草などを集めていく。

「これは…癒し葛。これは…月下美人草。これは…水泡堇。これは…ゲドクドクダミ!稀少ですね!やった!」

どうやら彼女は戦闘でもあれだけのことができるが、医療薬学の方が得意なようだ。しかも、恐らく好きなことでもあるのだろう。稀少だ、というゲドクドクダミを手にした時に興奮していた。それ程の熱意と知識があるようだ。

ドンモはそれをまじまじと観察しながら時折サタシャを手伝っている。ドンモは確か狩人を志望していた。その知識を貪欲に吸収しようとして集中して観察しているのだろう。

これならペルーナム達もいつかは採取依頼をこなす日が来るのだろうか。そう竜也は予感じみたものを考えながらも周囲を見渡していた。

スライムキングを倒した後も何度か小さなスライムとの戦闘があったが、生まれたてだったのかそこまでフオーナム達も苦戦することなく、倒して採取を続けた。

「集め終わりました！」

深沼に来て3時間。ついに採取依頼の数量を超えた。その後も携帯食を食べながら1時間ほど採取を続け、サタシャがほくほく顔を見せている。

判明したことなのだが、サタシャは収納空間という収納袋の上の魔法を身に付けており、採取した素材をその空間にいれていた。

することを終えて、皆が依頼の品を確認し、そして深沼から出発しようとした。その時だった。

地響き。

異常なまでの地鳴りと共にある魔物が一向の前に現れた。

それはエンペラースライム。

キングすらも上回るまさしく皇帝と呼ぶに相応しい魔物が、いやスライムが脱初心者パーティー一向の前に現れたのだった。

第三章 試練と力

深沼という湿地に突如地響きと共に現れたスライムの皇帝、エンペラースライム。その大きさはキングでさえも成人男性2人分の高さ
と5人分の幅があったというのに、その倍を優に上回る巨体をエンペ
ラースライムは見せつけていた。

そして、竜也達を見下すかのように見下ろしている。その様はキン
グなどとは圧倒的に格が違い、実力としても明らかに金級と同等かそ
れ以上。エンペラースライムは神聖とすら思わせる雰囲気をも醸し
出し、竜也を除くパーティー一向を存在のみで怯ませている。

「ふむ、強き者よ。我を見て怯みすらせぬものよ。…竜也というのだ
な。お前は私の試練を受けるだけの資格がある。どうする?」

なんとエンペラースライムは話しかけてきた。しかも、名乗っても
いない竜也を一拍おいて名前を当てる、ということは何かしらのそう
いうスキルか魔法を持つということ。

そして、試練?果たして何が目的なのか…

「確かに俺が竜也だ。そしてまず、お前は何者だ。お前の言う試練と
はなんだ。お前は何が目的だ。そこからだ。」

竜也は名を名乗ったあとに気を緩ませずに鋭く質問する。

「これは失礼した。我が名はグラン。スライムの超越種テンベストスライム災厄喰いな
り。スライム・獣・植物・悪魔・死霊・精霊・天使・竜種族の中で各
最強と呼ばれし八魔注が一柱なり。我が目的は真なる強者を鍛え上
げ我らが覇道を歩ませんとすることなり。要するに強者の育成だ。
そして、試練とは我との一騎討ち。勿論受けても受けずとも殺しはせ
ぬ。五体満足であることも約束しよう。仲間の無事もな。…後エン
ペラースライムではない。それは私の下の種族だ。」

…どうやらこの存在はエンペラースライムの更にその上の化け物
だという。そして、いきなりのわけのわからない試練。畏なのかもし
れない。しれないが…

「わかった。受けよう。畏であれなんであれな。このままでは巻き込
んで被害は甚大だろう。」

「ふむ。肝が座っている。安心せよ。わざわざ罫を張るなど下策も下策。特にお主には、な。」

受けるしかない。何せこいつは只者ではない。もし害を及ぼす気なら、間違いない周りは巻き込まれて死ぬだろう。そうでなくても致命傷は避けられない。

竜也達のパーティーはグランの圧倒的な威圧にすら負けず怯みながらも警戒しているが、ペルーナム達は別だ。言葉を無くして脅えている。それなら、一騎討ちするしか安全策はない。なら、腹を括る、それだけのことだ。

竜也は頷く。

「覚悟は充分だ。よし、なら我らのみ異次元へと入ろうぞ。気を引き締めよ！食らいつけ！これは試練。容易きものではないと理解せよ！」

グランはその場に詠唱を紡ぎ出す。その言霊は魔方阵の一字となり、その魔力は結界となり、詠唱者はそれを組み上げ、汲み上げ、完成させる。その瞬間、竜也とグランは異次元へと飛んだのだった。

「あれは…第五階魔法…そんな…」

絶望とも羨望ともわからぬサタシヤの声を聞きながら――

竜也とグランは異次元へと到達する。それはまるで宇宙が如く。その世界は完全なる無。

この時点から竜也はグランの一挙手一投足に最新の注意を向けていた。すると。

グランの体が縮んでいき人を象っていく。それは翁。衣服は魔法使いのローブのそれであるが全く怪しく無く、気品に溢れている。そして王たる資格を持ち、その力は全てを寄せ付けぬ圧倒的な覇。目の前のその存在はありとあらゆる生物を跪かせる、それだけのことができる次元へと変貌した。

「改めて聞くが俺を何故強くさせようとする？そしてお前は这个世界でどの位置にいる？教えてくれ。」

「竜也、お前を強くしようとするのはそれに届く強さを持ち、そしてそれを従える圧倒的な意思を持つが故だ。それ以上でもそれ以下でもない。そして我はこの世界で至天に位置する。後、これはまたとない機会でもある。竜也よ、これまで全力を出しておらぬだろう。さあ：来い。我に輝きを見せよ。」

その力が、威が、覇が煌めくようにグランから異次元空間の周囲一帯に拡がっていく。

蔽かで威圧的で聖なるその圧は竜也の全てにのし掛かり、竜也すらも拒む。

恐怖、絶望、憔悴、慟哭。

ありとあらゆるプレッシャーを跳ねのけて竜也はグランへと一足飛びで迫る。その速さ、凄まじさは正に閃光と呼ぶに相応しい。そして、閃光と化した居合い一閃。光が如く——

グランはそれを指で摘まんで受け止める。そんな程度では話にならぬと言わんばかりに。

そんなことはお構い無しに竜也は手首を返す。指を外してそのまま体を切り落とさんと腕一本で振り抜いて斬る。

それすらも嘲笑うかの如くグランは僅かに引いて避けた。当たるどころか掠りもしない。

止まぬ雨。それは剣戟。刀が煌めく光りが創る圧倒的な斬撃の雨。当たれば間違いなく一刀両断と化す程の威力を持つ。

だが、掠りもしない。どうした、当てぬか。と言わんばかりに。それはグランが雨の中濡れもせず動ける程の途轍もない速度を持つ存在でもある証左。当たらねば意味など無い——

「どうした？まだ本腰にも見えぬ。しかしこのままでは当たらぬし、反撃もしよう。全力も出さずに終わることとなるぞ？」

「この世界に来てまだ体に慣れていなくてな。準備運動と体への刷り込みだ。：待たせたな。」

一段、いや三、四段程に速度が上がる。光速へと至る程への爆発的な猛加速。剣戟の雨が暴風雨へと、いや嵐へと変化していく。斬撃、斬撃、斬撃。しかも、先程のように辺一面を切り裂く無差別攻撃では

ない。範囲を指定し、絶えずグランの方を執拗に狙い続ける死の斬撃嵐。

グランも遂に斬撃を捌くに至り始める。腕・脚・身体……しかしそれでも尚斬れない。掠らせもしない。超人ですら耐えるのに精一杯なそれを身体に一回も剣先を掠らせもせずには捌ききる。

「まだまだだ。まだ終わりではない。まだ来い。」

グランの挑発。それに応えるように竜也の斬撃の質が更に変化していく。その様は流水、継ぎ目なし、まるで生きて蠢くかのよう。

剛一点の剣が剛柔併せ持つ剣へと至る。力を覚え全力も覚えそれに身体と技術を合わせて委ねていく。

剣身一体の境地。まさしく渾然一体。

竜也の愛刀虎桜も呼応するかの如く煌めきを増してゆく。煌めき合い、引き出し合い、引つ張り合い、委ね合う。互いをよく知るからこそできる芸当に他ならない。

「ほう……よくやる。」

グランすら見惚れる。その技が素晴らしいものである証左にグランのローブが僅かに斬られた。間違いなくその速さ、凄まじさは覇に届きうる。

次の瞬間竜也は吹き飛ばされた。

「我が攻撃するにまで追い込まれるとは……流石なり。よくやった。だが、まだであろう?」

グランは竜也にそう試す。

グランは掌底を放ったのだ。ただそれだけ。しかし、それだけのこの余波ですらも異次元を揺らす程の威力を持つ。そして竜也は直前に反応するも反応しきれず僅かに力を逃すのみ。……だが。

「途轍もない力だな……このままでは勝てない。なら、勝たせてもらう。そうする他はない。」

竜也はその一撃に耐えきって立ち上がる。覇を叩き込まれる、つまり超人ですら耐えることが叶わぬそれを平然と喰らいきって。

しかし、力の差は歴然。只の掌底が竜也の体力を、生命力すらも持っていくのに対して、全力の剣の舞いはグランのローブを僅かに斬

るのみだ。しかもそれは斬ったすぐ後に再生し、元に戻っている。

それでも諦めが竜也の目には無い。諦めという概念すら知らないかの如くグランと再度対峙する。

「使いたくは無いが……これほどなら試しに使うというのも大丈夫だろう。」

竜也は立ったままに目を閉じ心臓の鼓動へと意識を深めていく。

僅かに空気をも震えさせて。

「アサルト殲滅」

竜也は全ての籬を外した

第三章 力と褒美

「アサルト
殲滅」

竜也は全ての籬を取り払う。それは力。それは意識。それは根源。ありとあらゆる制約を、無意識に潜在しているその楔を取り払い、内なる全てを解放していく。

火事場のバカ力、リミッター解除などと呼ばれるそれ。ゾーンとよく併発するために勘違いされるが、それはゾーンとは全く違う力。

ゾーンは五感が研ぎ澄まされ、そして身体がそれに順応し、一時の先見すら得る、いわば未来予知であるのに対してリミッター解除はあらかじめ脳が身体を守るためにセーブしていた力すら解放すること。

ゾーンが経験と集中で解放されるのに対してリミッター解除は危機を、つまりは只の力では対処できない時にもみ発動する。

竜也は現世では孤児だった。今でこそ、死ぬ前でも圧倒的な武を会得し、真つ当からでは敵う者こそいなかった。だが、武は天性で会得し得るものではない。何より孤児が裏社会で何かしらの保護を得られる筈もない。竜也が子供の時に己以上の相手に挑まなければならなかったことなど当たり前のようにあった。そんな子供が、大人ですら簡単に物言わぬ骸と化す環境で生き残る為に、只の力ではなく異常な力を得たのだ。

竜也の身体から爆発的な力が滾る。それこそ目には見えぬが、放たれる圧が今までの比ではない。それを機敏に、いや視認すらできるグランは口角を上げ、嗤う。
「行くぞ。」

「それ程の物が秘められておるとはな。さて、どれ程か確かめさせてもらおう。竜也よ。」

グランも呼応するかの如く力を込めていく。誰でも視認できる程の圧倒的な覇を身体中から漲らせて。

そして静止。あらゆるものが時を止めたと錯覚する、それ程までの完全な集中。互いに互いを見つめ、威圧し、見据えて初動を計る。

瞬間。動き始めはグラン。だが、それに合わせて同時に動き出す竜

也。

二の交錯。音を、いや空気を抜くその速度が一点でぶつかり合う。獄炎、冥水、絶氷、瞬雷、烈風、終土、そして生と死。

グランが放つ終焉を告げる魔法の各々。第五位階魔法すらも超越した魔法、極魔法と呼ばれるそれは、竜也に唸り蠢き、瞬いて迫り狂う。

掠りもすれば終わる死を呼ぶ魔法の各々を竜也は当然の如く避けていく。それに力を叩きつけんと迫るグラン。

拳と拳。脚と脚。刀と魔法。身体と身体。肉と肉。魂と魂。全てをぶつけ合い、叩きつけ合い、唸らせ合う。

グランの正拳突きに竜也が右ストレートをぶつけ、竜也のハイキックをグランが足刀蹴りで蹴り返し、竜也の袈裟斬りをグランが土極魔法で弾き、グランの体当たりを竜也はタックルで受け止める。

「フハハ！これ程までとは！面白い！これならどうか！」

グランが覇を込めて魔法を放つ。それは全てを呑み込んで尚喰らい尽くす根源の水。絶対的な無にも等しき極限の魔法を竜也は大きく構えた上段から絶大な膂力を込めて放つ極限の一刀。それはグランの水極魔法を縦に打ち消す。

「ふっ！」

竜也は息を一吐きするのに合わせ爆発的に加速、グランの懐に瞬間移動の如き速度で到達し、下から上へと斬り上げる。その瞬斬をグランは腕に氷極魔法を纏わせ全力で受け止める。そして互いに拮抗しあい、互いに押し合う。次元すら歪みかねないその暴圧の押し合いの中で互いに互いを認め合う。

膂力で竜也は押し勝ち、グランを吹き飛ばすも、すぐに互いが肉薄する。

竜也の右アッパーをグランが左腕で払い除け、グランの後ろ回し蹴りを竜也が前蹴りで押し退けて、竜也の刀の突きをグランが土極魔法で受け止める。

拮抗を打ち破るべく行われる攻防。一進一退。攻守転換。只の一撃も決まらぬが只の一撃も決めさせぬ紙一重の戦い。そして。

竜也とグランの全力の右ストレートが互いに炸裂し、そして互いに途轍もない速度で吹き飛ばされる。どちらも態勢を立て直し、アサルト嗤う。だが、そこまで。竜也は膝をつく。身体を酷使しすぎた為にアサルト殲滅を維持できなくなったのだ。グランもそれを見て力を抜く。

「……この世界の最強がこれ程に強いのか。アサルト殲滅でここまでとは思わなかった。」

「何を言う。至天と渡り合う者など存在せぬ。竜也、それ程までの力を持っておるのが末恐ろしいことよ。敵う筈どころか傷をつけられる筈も無かったのだからな。我は神すら喰らう無だ。我相手にここまでできたことを誇れ。だが、まだまだこの世界の力を引き出せておらぬよ。試練は合格だ。……そのアサルト殲滅という状態になる前に既に合格ではあったのだがな。覇を歩む力を持つ者、竜也よ。いずれその身に災厄が降りかかろう。だが、乗り越えよ。そして、我を越えるいつの日かを楽しみにしておるぞ……試練の褒美だ。我が分身を授けよう。」

グランは喜色満面で身体から分身を捻り出す。スライムであるできるそれは徐々に人を型どり、そしてグランと同じ姿となった。

「いつの日か我が真の身体に会いに来る時が来るかもしれぬな。さあ、戻ろうぞ。」

そのグランの言葉と共に異世界が歪みだし、そして、全てが色を変えた――

――
深沼、その場所で、竜也以外のパーティーは待機していた。勿論一切気を緩めずに。試練として連れ去られた竜也を待つて。

そこに突如竜也と一人の老人が現れた。
「来たー！」

全員が武器を構えて殺意を向けて警戒態勢へと移項する。竜也の無事を確認し、僅かに安堵するも後ろの老人に対して敵意を向ける。その敵意を解くべく竜也は説明する。

「待たせたな。後ろは大丈夫だ。味方となったグランだ。いきなりの試練だったが、害する気は元々無かったようだな。安心しろ。」

その説明に竜也以外の置いていかれたメンバーは不審がるも、明ら

かに目の前の老人は敵意を向けてこない。

「我はグラン。よろしく頼む。先程はいきなりですまなかつたな。だが敵ではない。味方だ。安心せよ。」

「本当に大丈夫なんですね…？ネロです。よろしく願います」

「サタシャです。」

「タロスつす。」

「ペルーナムと申す。」

「サヘルよ。」

「…トリンドル」

「ドンモです。」

グランも自己紹介したことでネロ達も自己紹介し、警戒が解かれていく。それを見て、竜也はパーティーは大丈夫だと判断し、帰る準備を進めていく。

竜也は新たな仲間と出会い、全力で試合をして認めあつた。これからどうするかも竜也は考えながら深沼を去っていくのだった。